大原遺跡・富田窯址

埋蔵文化財発掘調査報告書

1979.3

長野県南信土地改良事務所

長野県飯田市教育委員会

大原遺跡・富田窯址

埋蔵文化財発掘調査報告書

1979.3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

1．大原遺跡

2．富田窯址(机山山麓)

3．大原遺跡 II 調査区遺構群

4．集石炉 I 上部

5．集石炉 I 下部

6．大原遺跡 2号住居址

7．富田窯址 燃焼室

8．富田窯址 甕

9．富田窯址 壺

10．富田窯址 鉢類

11．富田窯址 茶碗，壺類

序

県営畑地帯総合土地改良事業として今回飯田市大原北の原地籍に農業の近代化をはかるため区画整理及び散水施設工事（75.4ha）が実施されることになりましたが，かねてよりこの地帯には住居址窯跡等，埋蔵文化財の存在が確認されており，文化財保護の見地から工事の実施に先だち飯田市教育委員会に委託して遺跡の発掘調査を行ったものであります。

今回の調査はたまたま昨年調査を依頼した上段部に当り調査団も昨年に引続き実施していただき，上下段の関連性，集落の特性，分布状況等，広範囲に亘り確認発見出来ましたことは非常に意義深いことと存じます。

報告書が出版されるにあたり，改めて文化財保護，記録保存の重要性をかみしめるとともに昨年に引続き終始調査を指導実施していただいた佐藤団長先生はじめ関係各位のご努力に厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和54年3月

南信土地改良事務所　下伊那支所長

八　幡　高　吉

例　　言

1. 本書は昭和53年度県営畑総事業小浜地区大原・北原工区計画に伴う，大原遺跡・富田窯址発掘調査報告書である。

2. 本書は報告書作成の期限があり，このため調査結果については充分な検討，研究がなされず，資料提供と問題提示の報告となっている。

3. 本書の編集及び執筆は佐藤が担当したが，自然的環境の地形地質は矢亀勝俊が分担している。

4. 写真は佐藤が，遺構実測図作成は佐藤・牧内住子が，遺物の作図は佐藤，遺構・遺物の製図は田口・佐藤が分担した。

5. 遺構実測図のうちピット内の数字は床面からの深さをcmで，遺物出土状況は床面からの高さをcmで（床面出土は数字を略す）あらわし，縮尺は図示してある。

6. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目　　次

序 …… 1
例　言 …… 2
目　次 …… 2
遺物図目次 …… 3
Ⅰ 環　境 …… 6
1. 自然的環境 …… 6
2. 歴史的環境 …… 7
Ⅱ 発掘調査経過 …… 11
Ⅲ 発掘調査結果 …… 15
(Ⅰ) 大原遺跡 …… 15
1. 住居址 …… 15
2. 集石炉・集石・焼土帯 …… 23
3. 土　壙 …… 25
4. 溝状遺構 …… 26
5. 遺構以外の遺物と石器一覧表 …… 27
(Ⅱ) 富田窯址 …… 29
Ⅳ まとめ …… 32
(Ⅰ) 大原遺跡 …… 32
(Ⅱ) 富田窯址 …… 33
遺物図 ― 大原遺跡・富田窯址 …… 34
図版　Ⅰ 遺跡　Ⅱ 大原遺跡遺構　Ⅲ 大原遺跡遺物
Ⅳ 富田窯址と遺物　Ⅴ 発掘スナップ …… 46
調査組織
おわりに

挿　図　目　次

図1　大原遺跡・富田窯址位置図及び周辺主要遺跡図（1：50,000）…… 4
図2　大原遺跡・富田窯址地形図及び周辺主要遺跡図（1：15,000）…… 5
図3－1　伊久間段丘断面図　　図3－2　伊久間段丘模型図 …… 6
図4　大原遺跡・富田窯址地形詳図，調査区域及び古墳所在位置（1：9,000）…… 10
図5　大原遺跡Ⅰ調査区遺構図 …… 14
図6　大原遺跡Ⅱ調査区遺構図 …… 15
図7　大原遺跡1号住居址 …… 16
図8　大原遺跡2号住居址 …… 16
図9　大原遺跡3号住居址・土壙2号 …… 17
図10　大原遺跡4号住居址溝状遺構 …… 18
図11　大原遺跡5号住居址 …… 19
図12　大原遺跡6号住居址 …… 20
図13　大原遺跡7号住居址遺物出土状況 …… 21
図14　大原遺跡7号住居址 …… 21
図15　大原遺跡8号住居址 …… 22
図16　大原遺跡9号住居址 …… 23
図17　大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号－1 …… 24
図18　大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号－2，集石 …… 25
図19　大原遺跡集石炉Ⅰ号－3 …… 26
図20　大原遺跡焼土帯 …… 26
図21　大原遺跡土壙1号・3号 …… 27
図22　大原遺跡土壙4号・5号 …… 27
図23　富田窯址 …… 29
図24　富田窯址と地形図 …… 30
図25　大原遺跡1号・4号・5号・6号住居址出土遺物（1：3）…… 34
図26　大原遺跡2号住居址出土遺物Ⅰ（1：3）…… 35
図27　大原遺跡2号住居址出土遺物Ⅱ（1：3）…… 36
図28　大原遺跡7号住居址出土遺物Ⅰ（1：3）…… 37
図29　大原遺跡7号住居址出土遺物Ⅱ（1：3）…… 38
図30　大原遺跡7号住居址出土遺物Ⅲ（1：3）…… 39
図31　大原遺跡8号住居址出土遺物（1：3）…… 40
図32　大原遺跡出土小型石器及土製品（1：2）…… 41
図33　大原遺跡出土石皿（1：6）…… 42
図34　富田窯址出土遺物Ⅰ（1：3）…… 43
図35　富田窯址出土遺物Ⅱ（1：3）…… 44
図36　富田窯址出土遺物Ⅲ（1：3）…… 45

1．伊久間原遺跡
2．馬場平遺跡
3．畑牛原遺跡
4．阿島遺跡
5．城原遺跡
6．伴野原遺跡
7．林原遺跡
8．林里遺跡
9．田村原遺跡
10．北原遺跡
11．恒川遺跡
12．寺所遺跡
13．松尾南／原遺跡
14．清水遺跡
15．大原遺跡
16．富田窯Ⅰ
17．富田窯Ⅱ
18．万場平遺跡
19．地神遺跡

A　郭Ⅰ号墳
B　小川塚穴古墳
C　奴山古墳
D　塚穴古墳
E　赤坂古墳
F　市場古墳
G　高岡Ⅰ号墳
H　雲彩寺古墳
I　妙前大塚
J　代田獅子塚

飯田市
飯田
上飯田
下飯田
鼎
座光寺
別府
新井
上郷
下山
八幡
代田
伊久間
馬場
恒川
大原
伴野
武陵地
田村
北原
阿島
城
清水
柏木
下殿岡
中殿岡
上殿岡
下瀬
中瀬
上瀬
下溝口
中溝口
上溝口
下溝口
下黒田
中黒田
上黒田
下川路
中川路
上川路
下市田
中市田
上市田
下平
中平
上平
下山村
中山村
上山村
下氏乗
中氏乗
上氏乗
下久堅
中久堅
上久堅
下虎岩
中虎岩
上虎岩
下千代
中千代
上千代
下小川路
中小川路
上小川路
下小沢
中小沢
上小沢
下小原
中小原
上小原
下小和田
中小和田
上小和田
下鼎
中鼎
上鼎
下座光寺
中座光寺
上座光寺
下別府
中別府
上別府
下上郷
中上郷
上上郷
下八幡
中八幡
上八幡
下代田
中代田
上代田
下伊久間
中伊久間
上伊久間
下馬場
中馬場
上馬場
下恒川
中恒川
上恒川
下大原
中大原
上大原
下伴野
中伴野
上伴野
下阿島
中阿島
上阿島
下城
中城
上城
下清水
中清水
上清水
下柏木
中柏木
上柏木
下殿岡
中殿岡
上殿岡
下瀬
中瀬
上瀬
下溝口
中溝口
上

図2　大原遺跡・富田窯址地形図及び周辺主要遺跡図（1：15,000）

A　第1号墳
B　第5号墳
C　中原2号墳
D　塚穴（ヶ谷）古墳
E　奴山一群
F　赤坂古墳
G　藤　塚

I 環　　境

1. 自然的環境

(1) 位　置

大原遺跡は長野県飯田市下久堅大原に所在する。その北には同一段丘面にある伊久間大原遺跡があるが，これが行政区画によって区別できない立地条件にあり，大原遺跡と統一するが妥当とみる。富田窯址は大原遺跡の東側にある机山の南西麓に所在する。

大原段丘は飯田市下久堅と喬木村とが境沢の先端部より東西に引く線を境にして行政区画を分けているが，同一段丘面にあり，標高545～560m，伊那谷第3段丘上位の洪積段丘に位置づき，南北で500m～1,000m，東西350～700mの広い段丘面をなし，西側の段丘端部は境沢とその支流の崖頭浸蝕によって4つの舌状台地に分けている。大原の東は伊那谷第1段丘面の机山（610m）の残丘があり，その背後は小川川の支流の浸蝕に削られた断崖となり，九十九谷と呼ばれる深い浸蝕崖となっている。さらに伊那層よりなる丘陵が東に高まって続き，この丘陵の東側に断層縦谷により形成された集落喬木村富田・飯田市上久堅があり，その背後に伊那山脈の鬼面山（1,889m），氏乗山（1,818m），金森山（1,702m）となって赤石山脈と並走している。

段丘面の北から西にかけては高距60mの段丘崖をもって北から南へ下段位の喬木村伊久間原，飯田市下久堅の大中尾・中尾・天神原・庚申原の段丘面があり，さらに西は70～90mの段丘崖をもって伊久間集落面となり，天竜川の氾濫原に至っており，北側は高距70mの急峻な浸蝕崖となり崖下を小川川が西流して天竜川に注いでいる。南は岩沢・富田沢の本支流の浸蝕が段丘面を削りとった小谷が起伏をもって山林となって続いている。天竜川を隔てて飯田市街地を正面にし，竜西段丘面に発達した町村を，その背後につらなる木曽山脈の山々を一望にしている。　　（佐藤）

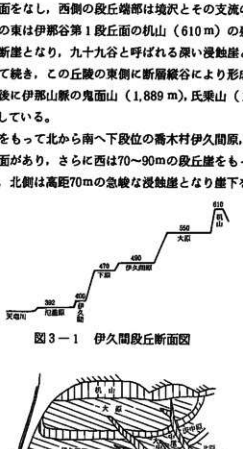


図3－1　伊久間段丘断面図

(2) 地形・地質

伊那盆地は東に赤石山脈，西は木曽山脈の間にはさまれた帯状の地である。中央にはほぼ南北に天竜川が流れており，天竜川の西を竜西といい，東を竜東という。この盆地の特徴は竜西・竜東ともに数段の見事な段丘が天竜川にほぼ平行に南北にわたって連らなっていることであ

図3－2　伊久間段丘模型図

る。この段丘上は僅か傾斜しているが平坦で、日照時間も多く，飲料水の得られる地には遺跡が各所にある。飯田松川が天竜川に注ぐ対岸の段丘は竜東の段丘の中でも最も標式的な雛段のように美しく重っている。これらの段丘を伊久間段丘ということにし，図3のように天竜川の氾濫原から75m程高い下原，伊久間原，大原，机山と4段を含む地である。

地質的に見て最上段の大原まで知るためには前記の段丘中の最下段からみればよくわかる。天竜河畦の沖積段丘から約20m，段丘崖の急坂の道を上るとすぐ砂礫層になり，この砂礫層を伊那層という。この伊那層の中間に安山岩や古生層の礫を火山灰質の土でかためた堅い層がある。この堅い層を土地の人は「ミソベタ層」といい，伊那層を上部と下部にわけている。伊那層は三紀の鮮新世に天竜川によって上流より運ばれた土砂が堆積したものといわれている。この急坂を上って下原に達する付近では伊那層の上部に天竜川によって運ばれたとみる花崗岩質の円礫の薄い層が見られる。更にその上部には火山灰を起源とする赤土（ローム）をのせている。この赤土は下原から大原に至る平坦面の全域を覆い内部はわからない。ところが段丘面が図3の2の如く小支流の沢によって浸蝕されている谷に入ると段丘内部の状況がよくわかる。これら小さな谷は雨期などに順次作られた傾向も見られるが，伊久間原では舌状に北方に入りこみ，小さな谷には「ミソベタ層」も見られ，耐水層となり，湧水もあり，集めて小さな流れになっている。大原面は伊久間原面より50m高い段丘崖上の平坦面であり，天竜川に注ぐ二つの支流 ― 北から境沢・岩沢と更にその支谷によって崖端浸蝕を受けて小さな谷が各所にある。これら小谷は林地や草藪であるが，露出している所では伊那層であることがわかる。この伊那層では部分的に堆積時代の水溜りの関係の粘土層が各所にある。また机山の道路の三叉路付近の工事現場の土採場に現われている壁の観察では，これも礫質から伊那層であることがわかり，上に赤土をのせ，更に机山から降り下った崖錐状の堆積物がある。伊那層は前記の様に礫を赤土様のものでセメントしているから雨水は浸透し難い。また段丘面凹所は降雨の多い時は湿潤地となる。従って小さな谷には湧水があり，清水の水溜もあり，小さな谷には水田の跡もある。

（矢亀）

(3) 微地形

大原は平坦な台地であるが，西に面す段丘端部は境沢の本支流の崖端浸蝕による四つの舌状台地を形成しているが，その崖端浸蝕部には崖下に湧水による小さな流れをみるが，大原面に直接関連する水便はみられない。しかし南面する段丘面を切る岩沢とその支流による谷頭浸蝕は北に進み段丘南端の中央部にえぐりこんできている。ここには湧水があって畑に来る人たちの水飲場となっていた。この湧水を利用した段々の小水田が谷に沿って並んでいるが休耕田となって荒らされている。この谷頭浸蝕に向って机山山麓から南西に僅かな凹地帯が続き，雨が降れば水が溜る水はけの悪い所である。机山山麓から岩沢にかけての一帯には粘土層がある。この粘土層と，湧水，浸蝕崖の傾斜面と周囲に広がる松山が富田窯を築いた立地条件となっており，明治・大正期にかけて瓦が焼かれていた跡もある。谷頭浸蝕を囲む状態に段丘縁部に遺跡は立地しているものとみられる。

（佐藤）

2. 歴史的環境

大原段丘面には，飯田市と喬木村が東西に切って行政区画がなされており，このため登録遺跡は大原遺跡と伊久間大原遺跡の2遺跡となっているが，同一段丘面にあり，地形的にも分けることはできないし，また飯田市と喬木村の境界も一般的には知られていない。このため大原遺跡として統一するが妥当と思われる。

大原でいままでに表採された遺物には打石斧・黒曜石片があり，縄文中期の包蔵地とされていた。また土師器，須恵器片の採集があったといわれているが，分布調査ではこれらの採集はなく，南側の段丘縁部で富田焼の一見須恵器ともみられるものが，富田窯址から離れた場所から発見されている。台地の北北西端部には須恵器・土師器の破片が表採されているが，そこにある奴山古墳群に関連するものとみられている。

奴山古墳群は6基の古墳があったが現在1号・2号・3号・4号墳が現存しているが，1号墳を除き周囲は畑のために削られている。台地の北北東端部に藤塚があるが古墳というより富士山信仰の遺跡とみられる。

机山の南西山麓に富田窯址がある。富田窯址については，喬木村富田地区にも富田窯址があり，一般的には富田地区にあるを富田窯と呼んでいるが，大原にある窯址は平沢清人先生によって富田窯とされている。窯址の土地所有者は富田地区の人であり，大原段丘面の土地所有者・耕作者の大半を富田の人達が占めているのが現況であり，この開発も富田の人達によるものが大きかったものである。

大原周辺の遺跡をみると，大原段丘崖下には北から伊久間原・大中尾・中尾・天神遺跡が続いている。喬木村伊久間原遺跡は昭和27年・29年度農道開発事業の際，縄文中期・古墳時代後期の住居址13が，昭和52年度畑灌水工事前の発掘調査[1]で縄文早・中・後・晩期，弥生後期の住居址19と方形周溝墓・円形周溝墓3基が調査され，また表面採集遺物の多いことで以前から注目されており，昭和53年度畑灌水工事に伴う遺構確認立入調査[2]では縄文早期末から平安時代にわたる各時期の住居址342が確認され大集落の存在が確かめられた。大原段丘崖下に赤坂古墳が現存しており，中世伊久間城跡があったが，その跡を残していない。

飯田市下久堅の大中尾・中尾・天神遺跡は未調査であるが，先土器時代とみる石器をはじめ縄文中・後晩期の土器片，石器，弥生時代の磨石鏃等が表採されており，昭和54年度発掘調査予定になっており，注目される遺跡とみられる。これら遺跡の南は段丘面が天竜川の支流の小河川の浸蝕によって分断され，その規模は小さくなり，それら小台地面に縄文・弥生・古墳・平安時代の遺跡が分布している。これらの中で天竜川に接した氾濫原にある川原遺跡は昭和44年暮から45年正月にかけ一部トレンチ調査をなし，地表下2mで縄文中期・それより上へ後期・晩期の土器が出土し，その上に弥生中期末恒川式の住居址が発見され注目されている。下久堅地区にある古墳は12基の存在が認められているが大原遺跡のある下虎岩区の洪積下位段丘面に7基があり，大部分が消滅古墳であるが，塚平古墳は封土は削られているが石室を残している規模の大きな古墳である。

大原段丘北東の崖下の小川川の南岸沿いに小川塚穴古墳が石室を露出しており，その西側の堂ノ前遺跡では石剣の頭部が発見されており，家ノ下・平畑では弥生後期の遺物が採集されている。小川川北岸の低位段丘面には両平・田本平遺跡があり，縄文中期・弥生後期の遺物が発見されており，喬木中学校のある馬場平遺跡では中学建設の際に縄文前期末から古墳時代に至る各期の好資料が発見されている。沖積段丘面の里原から加々須川以南遺跡は未調査であるが，弥生時代から平安時代に至る遺跡として注目されている。喬木公民館・保育園のある郭遺跡は縄文中期・弥生中期の住居址の存在が確かめられ，ここには竜東地域唯一の前方後円墳郭1号墳がある。加々須川の北に阿島遺跡[4]があり，弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。小川川の北の洪積中位段丘面には帰牛原[5]・伴野原遺跡[6]があり，伊那谷屈指の遺跡として知られている。喬木村西北部低地（伊久間，小川，阿島）の古墳は37基があり，竜東地域の古代中心地帯であったとみられている。[7]

大原の東にある富田地区は断層縦谷により形成された盆地にあって，遺跡の規模は比較的小さいが，小平・下塚・地神・市場等の縄文・弥生・古墳時代にかけての遺跡が発見されており，古墳は8基が数えら

れているが，市場古墳が墳丘を残している。

天竜川の対岸に見る沖積地帯には北から飯田市座光寺恒川遺跡は弥生中期末恒川式土器の標準遺跡であり，現在進行中の国道153号座光寺バイパス路線調査では和銅開称（銀銭）の出土をはじめ多くの貴重な遺物と大規模な奈良・平安期の遺構が発見され，官衛址または寺院址とみられ注目を浴びている。その西に接する高岡古墳・上郷町の雲彩寺古墳はともに県指定の前方後円墳である。飯田松川の南飯田市松尾地区には弥生中期初頭の寺所式土器の標準遺跡寺所遺跡があり，その南の天竜川に沿う低位面に前期土師器の多量の出土をみた清水遺跡[8]がある。松尾には古墳65基と伊那谷で最も古墳分布密度の高いところで，前方後円墳は8基[9]を数えており，円墳ではあるが妙前3号墳（大塚）[10]では眉庇付冑をはじめ鉄器・武具の多くが発見され，本地方最古の古墳とも推定されている。

注 1. 大沢和夫・今村善興「長野県下伊那郡喬木村伊久間原住居址」信濃4ノ12
2. 喬木村教委「伊久間原」1978
3. 〃 「伊久間原遺跡立合調査報告書」1979
4. 宮沢恒之・佐藤「喬木村阿島遺跡」長野県考古学会誌 第4号
5. 喬木村教委「帰牛原」1971 「帰牛原南原遺跡」1973
「帰牛原城本屋」1977 「帰牛原十万山西裾地城」近刊
6. 豊丘村教委「伴野原遺跡」近刊
7. 市村咸人「下伊那史第三巻」
8. 飯田市教委「清水遺跡」1976
9. 市村咸人「下伊那史第二巻」
10 飯田市教委「妙前大塚」昭和47年

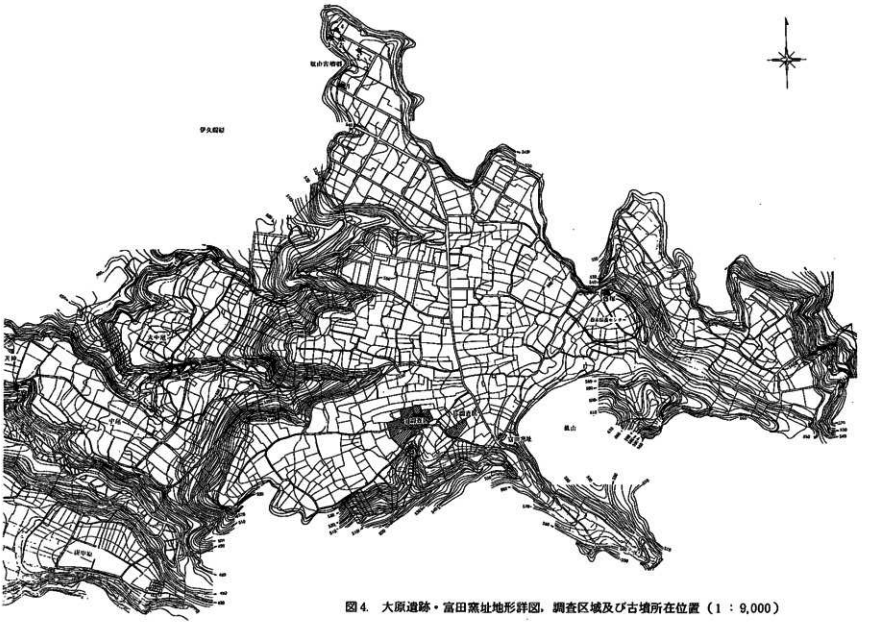


図 4.　大原遺跡・富田窯址地形詳図，調査区域及び古墳所在位置（1 ： 9,000）

Ⅱ 発 掘 調 査 経 過

昭和53年度大原地区の畑区画整備計画に伴ない農道の開設・桑園の抜根，一部圃場の整備がなされることになり，これに先立ち大原遺跡と富田窯址の発掘調査が，長野県南信土地改良事務所の委託により飯田市教育委員会が受託して行われたのが今次発掘調査である。

発掘調査は，昭和53年11月6日より昭和54年1月23日まで正月休みと雨・雪の日を除き作業を続け，2月4日より9日まで再調査と段丘面一帯の分布調査，地質調査を行い，現場調査日数62日を要した。

調査は岩沢の支流の谷頭浸蝕のえぐりこむ地点を中心にしてⅠ調査区，それより東の一段高位となる荒し畑にⅡ調査区を設けた。富田窯址は土採場と計画変更になった畑の一部（桑畑を除く）借り調査した。調査後遺跡の埋戻しをなし，できるだけ遺構の保存をはかることにした。調査面積は大原遺跡2,400 ㎡，富田窯址120 ㎡である。

発掘調査日誌

月日	天 候	日 誌
11. 6	晴	器材運搬・テント張り，Ⅰ調査区にグリッド設定
7	晴・くもり 雨	グリッド調査…粘土質の土で遺構検出はむずかしい。 富田窯址地形測量
8	晴	グリッド調査　1号住居址検出
9	〃	調査　2号住居址検出　土壙1号検出
10	〃	完掘　調査　完掘
11	〃	測量　完掘測量　測量
12		日曜日休
13	雨	休
14	晴	グリッド拡張調査
15	くもり 時々時雨	3号住居址検出　溝状遺構検出
16	晴	プランを確かめる
17	くもり・雨	（午後作業不可）　調査　調査 ― 排土作業
18	晴	掘り上げ　調査
19		調査
20		調査 ― 新旧の溝あり （新しい溝は畑の境界となる）
21	〃（朝凍る）	調査終わる　4号住居址を検出
22		調査 溝に切られ僅かに住居址を残す
23	〃	グリッド拡張調査　3号住居址測量
24	〃	
25	〃	Ⅰ調査区南端部に遺構の存在が予想される。
26	くもり、雨	休み

月日	天候	日誌
11.27	雨	休み
28	晴・くもり	富田窯址工事の関係で道路西側の調査にかかる。陶片多し。
29	〃	掘り上げ ― 焼土を全面にみるが窯址とは認められない。
30	(朝凍る)	5号住居址検出 ― プランはっきりしない。溝状遺構・4住の測量
12.1	晴	富田窯址上の畑の調査にかかる。
2	くもり・雨	(午前作業) 調査，陶片多し
3	晴	調査 ― 窯址としてまだ把握できない。
4	くもり・雨	3この掘りこみがみられるが窯址とはっきりしない。5号住居址の調査
5	晴	調査 ― 陶片多量出土　5号住居址調査掘上げ，6号住居址検出掘上げ 7号住居址検出，調査
6	〃	北側2この掘りこみ掘上げ，　調査 ― 石器多く，覆土深い。 グリッド東に拡張調査，有舌ポイント出土
7	〃(凍る)	調査 ― 遺物多し　細石器状の剥片石器出土
8	〃	測量　調査　石器出土付近の排土作業
9	〃	測量　5，6号住居址測量，完掘測量　作業
10	くもり 時々雨	作業，調査
11	晴，強風	(テントの補強作業)
12	晴	2か所に住居址とみる落ちこみあり
13	〃	8号，9号住居址検出，調査
14	〃 (あたたかい)	8号住居址遺物多い。9号住居址土器なく， 石鏃と黒曜石，チャート片のみ。
15	〃	8号，9号住居址調査
16	〃 (あたたかい)	完掘，測量，Ⅱ調査区グリッド設定 (ブルトーザーで草の排除)
17	〃	Ⅱ調査区グリッド調査
18	〃	調査，焼土をもつ面があるが不明
19	(寒くなる)	富田窯下部調査　調査 ― 遺構発見されず。
20	〃(寒い)	燃焼室とみるを検出　調査
21	〃(寒さきびしい)	壁を堅め，内部に粘土で堅め，陶器をしく　調査 ― 集石を検出
22	くもり 寒い	掘上げ，測量　調査
23	くもり・雪	集石拡張調査
24	雪	休み
25	晴	富田窯測量　除雪作業
26	晴(寒い)	調査，測量
27	くもり，晴	燃焼室底部に敷く陶片とり上げ。　調査，土壙3・4・5号検出 測量，調査を終わる。　掘上げ，測量
28 54.1 1.7		年末年始の休み……この間遺物の整理
1.8	晴	集石炉Ⅰを検出，焼土帯の検出……上部に炭，灰多し
9	〃	周辺拡張調査　拡張調査
10	〃	Ⅰ調査区埋戻し作業

月日	天候	日誌
1.11	〃（北風寒い）	作業　集石炉Ⅰの内部調査，集石炉Ⅱを検出
12		焼土帯調査，測量　集石炉Ⅰ，Ⅱ調査 ― 上部測量
13	雪	休み　遺物整理
14	雪荒れ	〃
15	くもり	〃
16	晴	〃
17	〃	Ⅰ調査区埋戻し　集石炉Ⅰ，Ⅱ調査 ― 下部
18	雪・雨	休み
19	晴	富田窯址埋戻し　調査，測量　周辺の調査
20	〃（終日寒い）	作業　集石炉Ⅰの2分の1　たち割調査，測量
21	晴・時雨	底部調査
22	晴	休み　教育委員会打合せ
23	〃	テント，器材の撤収　調査完了
2.4	〃	Ⅱ調査区東側の再調査
5	晴・雨	大原段丘面の分布調査
6	雨・くもり	休み
7	雨・くもり	分布調査
8	晴・くもり	奴山古墳群・藤塚の位置確認，調査（地図に記入）
9	晴	地質，地形調査（矢亀勝俊先生を依頼）
3.10	雨	名古屋大学へ富田焼について指導を受ける（楢崎彰一先生）

現場調査後，遺物の整理，遺構図の整理，遺物実測，製図，原稿執筆と予定外に時間を要した。この間，遺構，遺物，地形，地質について各分野の方々の指導・助言をえている。

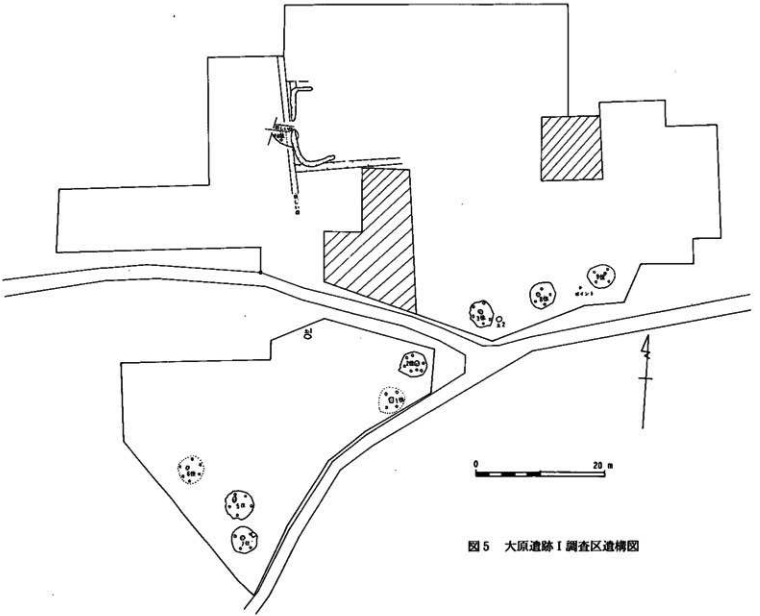


図5　大原遺跡Ⅰ調査区遺構図

Ⅲ 調　査　結　果

（Ⅰ） 大 原 遺 跡

大原遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。（図5，6）

住 居 址9　一　縄文早期？1，縄文中期中葉末8

集 石 炉2，焼土帯1，集石1

土壙5

溝状遺構1

1. 住　居　址

住居址はⅠ調査区の谷頭浸蝕に面した段丘縁部に沿って発見され，4号住居址のみが縁部から47m入った位置にある。

1号住居址（図7）

2号住居址の南西2.5mにあり，表土下20cm～25cmに炉址が発見され，住居址を確認したもので，開墾

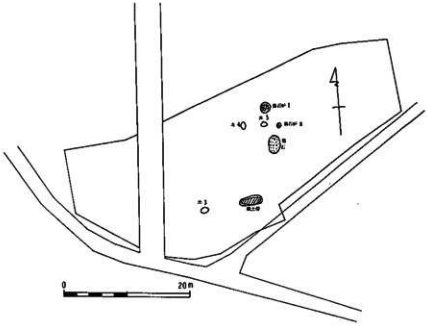


図6　大原遺跡Ⅱ調査区遺構図

時に壁は削りとられ僅かに竪穴であった壁の痕跡を残していた。推定径3.5mの円形の竪穴住居址とみられる。床面は堅く，主柱穴は4こ整った配置にあり，炉址はほぼ中心部にあって石囲炉とみるが北側に石を残すのみではずされている。

遺物（図25の1～3）は比較的少なく，図示できるものは3点のみである。器肌は荒れ，文様の磨滅したもの，無文のものが多い。櫛形文とみられるものもあるがはっきりしない。1の渦文は加曽利E式にみるものとは異なり彫りが深い。石器は発見されていないが，おそらく耕作時に捨てられたものとみられる。炉址の形態，土器からみて縄文中期中葉末の住居址とみたい。

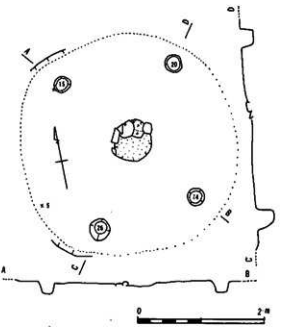


図7　大原遺跡1号住居址

2号住居址（図8）

1号住居址の北東2.5mにあり，南北径3.7m東西径4.1mの円形であるが，八角形ともみられる弱い突出部をもち，特に西側に強い突き出しをもつ。ローム層に深さ北壁で20cm，南壁で10cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く全面に木炭が多くみられる。柱穴は7こ検出されているが，主柱穴は6ことみられる。炉址は中心よりやや東に寄ってあり，石囲炉で底部には土器片を敷きつめている。炉の西側に径65

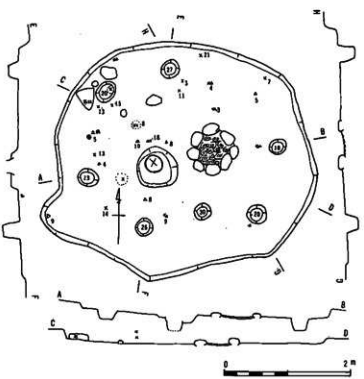


図8　大原遺跡2号住居址

cmの円形の掘りこみがあって，その中に埋甕があり，内部には灰が充満しており，周囲には焼土はみられない。最初に炉として使用したものともみられ，火種用の炉であったともみられる。

遺物（図26・27，図32の9～13，図33の1）は多く，土器はキャリパー型の深鉢を主体とし，文様は口縁横帯文で細い粘土紐の貼布による直線，曲線，円の結合による隆起線文によって飾られている。胴のくびれ部の下に櫛形文が施される。図26の1は埋甕，5は床面出土で器形を残すが，いずれも脆く復原不能である。2は細い粘土紐による渦巻文を，6は櫛形文を口縁部に施すものであり，3・4は口縁帯は無文である。縄文中期中葉末の土器である。

石器（図27の12～30，図32の9～12，図33の1）は打石斧が主体であり，横刃形石器がつぎ，半磨製石斧，石錘，凹石，石皿，石鏃，剥片石器があり，海浜石（図32の11・12）2この出土もみている。（表2参照）

土製品に図26の9のミニチュア土器と，図32の13の土偶脚部がある。

2号住居址は特殊な要素をもつ住居址とみられる。炉址の形態，その西側にある埋甕等から推定される。縄文中期中葉末の勝坂期から加曽利E期への移行期の住居址である。

3号住居址（図9）

2号住居址より北東9m，8号住居址の西6.5mにあり，南北3.95m，東西3.6mの楕円形をなすが，8か所の弱い突出部があるが，南側の2か所は大きく突出している。北壁で25cm，南壁で13cmの深さにロ

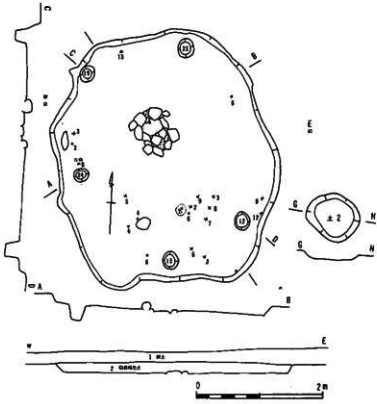


図9　大原遺跡3号住居址・土壙2号

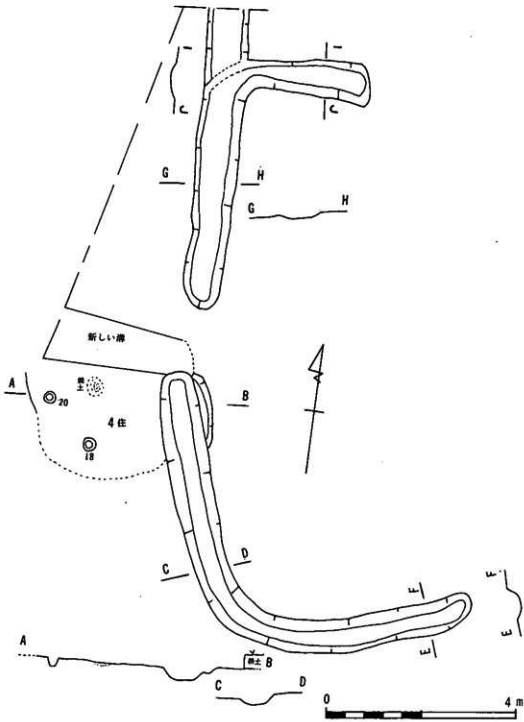


図10　大原遺跡４号住居址・溝状遺構

ーム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は５ことみられる。炉址は中央よりやや北西に片寄ってあり，石囲炉で底部に石を敷きつめている。

遺物（図25の４～14）土器は南側の覆土下層に多く発見されており，石器は覆土上層の出土が大部分を占めている。

土器は深鉢が主体となり，細い粘土紐の貼布による文様構成が主となり，４は口縁帯部は無文，その下に粘土紐の貼布がみられ，５の口縁横帯文と７・８にみる粘土紐の貼布による文様であり，６は口縁部を４分画する凹レンズ状の把手がつき，細隆起線文で飾るものとみられる。９は櫛形文をなすものとみられ縄文中期中葉末の土器である。

石器（図25の11～14）には石鏃・打石斧・小型磨石斧があるが量的に少ない。

４号住居址（図10）

段丘端部から47m，２号住居址より37m北に，１軒のみかけ離れた位置にある。溝状遺構と新しい畑境の溝によって３分の２は切られ，耕作によって壁の大部分は削りとられ，僅か東側に残すのみである。推定径４m前後の円形をなす竪穴住居址とみられる。残る床面は堅く，柱穴は２こ発見されているが，その配置からみて主柱穴は５～６ことみられる。中心部より西に片寄って焼土がある。溝によって削られているが，その位置から見て炉址とみられ，底部を残すのみである。

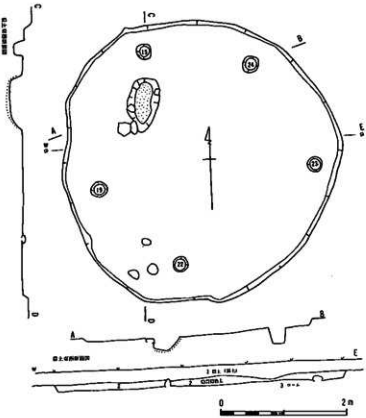


図11　大原遺跡５号住居址

遺物（図25の15～19）は少なく土器は無文のもの２点と石器である。打石斧４と横刃形石器１の出土をみたにすぎない。（表２参照）縄文中期中葉末の住居址とみたい。

５号住居址（図11）

Ⅰ調査区南西端に発見され，南１mに７号住居址がある。径南北4.35 m，東西4.4 mの円形をなすが，西側には僅かな突出しがみられる。北壁で18m，南壁で10cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は５こ，整った配置にあり，炉址は北西側に片寄ってあり，長楕円形の地床炉

とみられるが，横に置かれた石と2この残る石からみると石囲炉とも思われるが，石のはずされた痕跡はない。

遺物（図25の20～24，図32の15）は少なく，図示できる土器は3点のみで，縄文中期中葉末のものとみられ，石器には小形打石斧と横刃形石器と有茎石鏃がある。（表2参照）表土下15cm～20cmのローム層に掘りこまれた住居址であり，覆土も10～18cmと浅く，開墾時や耕作によって遺物が除去されたものとみられる。

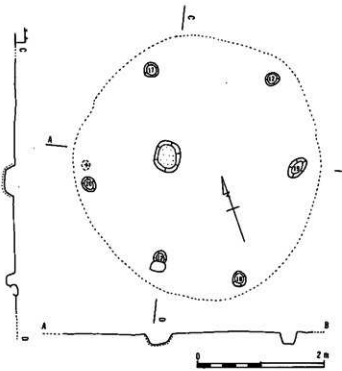


図12　大原遺跡6号住居址

6号住居址（図12）

5号住居址の北西5mにあり，地表下18cmに床面に炉址が検出され，住居址を確かめたものである。このため壁は削りとられたものとみられる。推定径4m前後の円形の竪穴住居址とみたい。床面は堅く，主柱穴6こが発見され，炉址は中心よりやや西に片寄ってあり，焼土は著しく，地床炉とみる。

遺物（図25の25～29）は少なく，土器は西側柱穴に沿って一括出土をみたが，脆く，無文が大部分で，図示の3点が文様をもつ。縄文中期中葉末の土器とみられる。石器は打石斧1と石鏃1の出土をみたのみである。（表2参照）縄文中期中葉の住居址である。

7号住居址（図13・14）

Ⅰ調査区南端部に発見され，5号住居址の南1mにある。径南北4.1m，東西3.9mの円形，北壁で45cm，南壁で20cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴5こが検出されているが，主柱穴は4ことみられる。炉址は中心よりやや北西に寄ってあり，石囲炉である。東壁に沿って長径80cm，深さ20cmの半楕円形の掘りこみが付く。貯蔵穴とみられる。

覆土に集石（図14）があり，3乃至4のパートをもち，廃屋墓とみられ，遺物は全面にわたって出土をみているが，覆土出土が多い。

遺物（図28・29・30，図32の14，図33の2）は多く，土器は深鉢を主体とし，文様は粘土紐の貼布による隆帯と櫛状具による縦の沈線の組合せによって構成されている。図28の1・2は器形をもつもので，1は口唇部は内側に幅広く平らに折れこみV字状の隆帯と2本の対となる押引沈線で飾られる。口縁帯部は無文となり，頸部から胴部にかけては四分画する細い粘土紐の貼布で飾る太い隆帯が下がり，その間を人

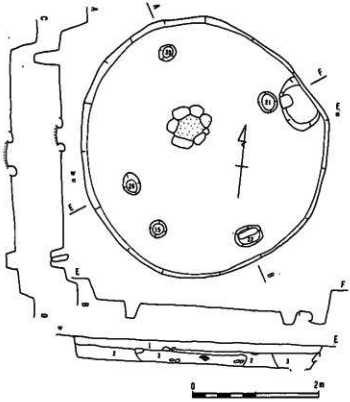


図13　大原遺跡７号住居址

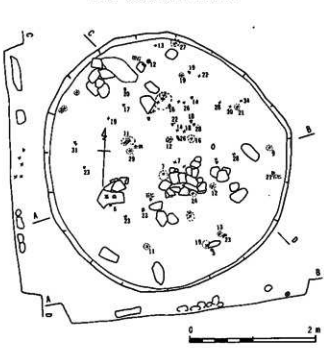


図14　大原遺跡７号住居址遺物出土状況

体文の退化ともみる懸垂文と沈線で埋めその下に櫛形文が付く。２は口辺部はくの字状に強く内湾しそこを沈線で埋め，それより四分画する隆帯の懸垂が胴上部に下がり，胴上部には細い斜条線とそれに交差する細い粘土紐の貼布があり，その下にV字状をなす櫛形文が付き，さらに櫛形文の省略とみるV字状の刻目をもつ隆帯が施されている。図29の５は細い粘土紐による渦巻文が付き複雑な文様構成をなす土器であるが，脆くて十分に文様を知ることができなかった。これらはともに飾られた特殊な土器である。

図28の４・５は大きな波状口縁をなすキャリパー形深鉢で４は角状の突起をもつ。口辺帯部を粘土紐の隆帯の区画文をその間隙を沈線で切り，さらに５はそれより刻目をもつ隆帯が八分画して胴部へと下がる。図29の２は角状突起の把手であり，細い粘土紐を巻付けて飾っている。

縄文をもつものに図29の4がある。縄文中期中葉末の土器群である。

石器（図29の15～20，図30，図33の2）は多く床面出土には打石斧3，石匕1，横刃形石器1，凹石1，砥石1があり，覆土出土には打石斧7，横刃形石器5，石錘1，凹石1，石皿1，敲打器1がある。（表2参照）

土製品には図32の14の土偶脚部があり，大形の土偶である。

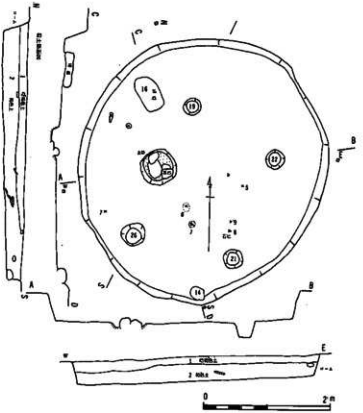


図15　大原遺跡8号住居址

8号住居址（図15）

3号住居址の東6mに，また東5.5mに9号住居がある。南北4.1m，東西3.9mの円形，北壁で45cm，南壁で23cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は4こ，やや南北に片寄って配置されている。炉址は中心より西に片寄ってあり，内部に3この石と石皿1こがはいりこんでおり，石囲炉が崩され入れられたとみられるが石のはずされた痕跡はなく，北側の炉壁に土器片が張られた状態にあり内部にも土器片は多くみられた。

遺物（図31・図33の3）は比較的少ない。土器は深鉢で，炉址出土の図31の1は大形のキャリパー形深鉢で，口縁帯部と胴部を長方形に八分画し，その間を縦の深線で埋め，胴下部に櫛形文を施す整った文様構成をなしている。2は口辺部に波状文がみられ平出Ⅲ類Aとみられ，4は口縁部に櫛形文をめぐらし，3・5・6は粘土紐の貼布による文様構成で，5は彫りの深い渦文から放射状に粘土紐の隆帯が出ていくものとみられ，縄文中期中葉末の土器を主体とするものである。

石器（図31の7～14，図33の3）は少なく，打石斧・横刃形石器・石匕・石皿がある。図33の3の石皿は長さ52.9cm，幅32cmと大きなもので，下伊那地方では稀にみるものである。（表2参照）

9号住居址（図16）

8号住居址の東5.5mにあり，Ⅰ調査区の東端部に発見された。南北3.65m，東西4.1mの楕円形をなし，北壁で25cm，南壁で18cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は4こ整った

配置にある。炉址は中心より北東に片寄ってあり浅い地床炉で，焼土は僅かに認められたものである。

遺物（図32の4～7）

土器は表土より磨滅した無文の土器が1点出土しているが，本址のものとはみられない。遺物には石鏃とスクレーパーとみるものの他，黒曜石とチャートの破片数点が検出されている。図32の4は黒曜石製長さ2.5cm，幅1.1cmと細長の石鏃，またはポイントとみられるものである。5の石鏃は黒曜石製で基部を欠く。6は黒曜石製で基部を，7はチャート製で刃部を欠くがスクレーパーとみられる。

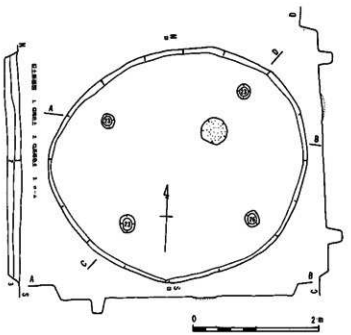


図16　大原遺跡9号住居址

土器はなく，石器のみで住居址の時期は決め難いが石器からみて縄文早期を下ることはないと思われる。

9号住居址周辺の遺物には（図5）住居址の西1.5mより有舌ポイント（図32の1）と北1mより細刃器とみる剥片石器（図32の2・3）2この出土をみており，9号住居址との関連も考えられるものがある。

2.　集石炉・集石・焼土帯（図6）

Ⅱ調査区より検出され，集石炉Ⅰ号の南々東2.5mに集石炉Ⅱ号があり，その1.5m南に集石があり，さらに南7mに焼土帯がある。

集石炉Ⅰ号（図17・18・19）

集石炉Ⅰ号は径1.75mの円形，深さ35cmの椀形状にローム層に掘りこみ，全面に礫を敷きつめ，その上に一抱以上の大石6こと，拳大から人頭大の石が入り，その間隙は木炭と灰が充満し，底部から周囲のロームの焼土は著しく，ローム層中にも木炭が含まれているのが注目された。内部よりの遺物はなく，周辺より黒曜石片の出土をみている。

集石炉Ⅱ号（図17・18）

集石炉Ⅱ号は南北径77.8cm，東西径70cm，深さ20cmの変形の楕円形をなす土壙状の掘りこみなし，上部に礫が詰まり，その下に焼木がみられ，木炭，灰の層があってその下はロームに木炭，灰を多く含む層があってローム層となる。底部から周囲の焼土は著しい。内部よりの遺物はなく，周辺より黒曜石片１点を検出している。

集石（図18）

集石は南北２２ｍ，東西１.８ｍの範囲に不整形に拳大の石がロームに入りこんでいるものである。この集石はⅡ調査区1,000㎡の範囲に１個所のみ発見されたもので，最初は自然の礫層とみられたためはずされた石も多い。調査によって地山の礫の露出ではなく，集石の下部はローム層となり，集石中には焼石の多くもみられた。集石中よりの遺物は発見されていないが集石炉に関連するものとみたい。

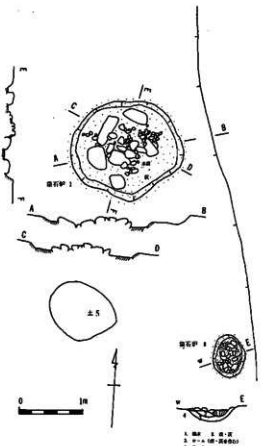


図17　大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号－１

焼土帯（図20）

焼土帯は上部に真黒に木灰をかぶり，この下に幅南北１.４ｍ～１.６５ｍ，東西３.８ｍの不整形な長楕円形をなし，二段になる深さ15cmの浅い舟形をなす掘りこみをもち，底部から周辺にわたって顕著な焼土帯をなすものである。内部よりの遺物はなく，東縁部に石鏃１こが検出されたのみである。近世のものとみられたが，木炭の堆積状態，ローム層に入りこむ木炭と焼土は古い時期のものと認められ，集石炉を含む一連の遺構と認められた。

これら遺構がローム層にまで及んで焼土に木炭を含み，遺物には土器はなく，石鏃と黒曜石片のみの出土，Ⅱ調査区より僅か低地帯をはさんでⅠ調査区東端部よりの有舌ポイント，細刃器ともみられる剥片石器の出土等の関連からみて縄文草創期に位置づく遺構群と考えたい注目すべき遺構である。

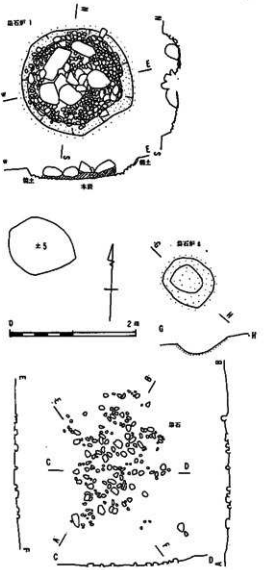


図18　大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号－2，集石

3. 土　　炉

Ⅰ調査区に1号・2号が，Ⅱ調査区に3号・4号・5号が検出されている。土壙1号・2号は縄文中期中葉末の住居址群に関連するものとみられるが，出土遺物はなく不明である。Ⅱ調査区の土壙5号は集石炉Ⅱ号の西1.5mにあり，その西2.5mに土壙4号がある。焼土帯の西5mに土壙3号があるが遺物はなく，集石炉，集石，焼土帯に関連するものか把握されなかった。

大原遺跡土壙一覧表（表1）

番号	図番号	大きさ(cm)	深さ(cm)	形　状	主軸方向	遺物	遺物図番号	備　　考
1.	21	70×100	27	楕円形	N85°W	なし		他の遺構から離れる
2	9	75× 85	12	〃	N82°W	〃		3号住居址の東52cmにある
3	21	97×140	38	〃	N80°W	〃		
4	22	116× 80	27	〃	N 3°E	〃		
5	〃	85×108	25	〃	N82°W	〃		

4. 溝状遺構（図10）

Ⅰ調査区の北西部に発見され，4号住居址を切っている。南北12.4ｍ，東西は南溝で5.5ｍ，北溝で3.5ｍの範囲にコの字状に幅70～90cm，深さ10～30cmローム層に掘りこむ溝をめぐらし，西溝中央部に幅140cmの陸橋状の開口部をもつが，畑境界溝が一部かかりはっきりしない。南北両溝は西溝よりコーナーは隅丸方形をなす形状をもって東に向うが，東にいくに従い浅くなり消滅する。西溝の北コーナーからさらに北に向う溝が検出されたが，境界溝にあたり不明となる。

遺物はなく，縄文中期中葉末の住居址を切っており，それ以後のものであり，方形周溝墓ともみられるものであるが，周囲の状態からみてそうともいえず，その性格は把握できなかった。近世にいたっての開墾時の根留溝または畑境界溝は調査区の各所にみられたが，覆土の状態からみてそれ以前の溝であることは確かである。

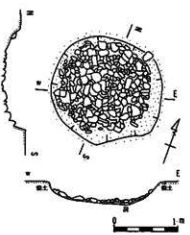


図19 大原遺跡 集石炉Ⅰ号－3

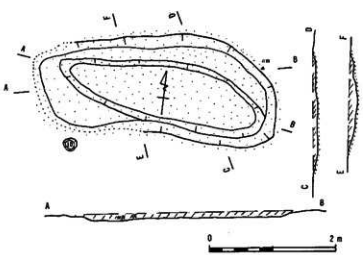


図20 大原遺跡焼土帯

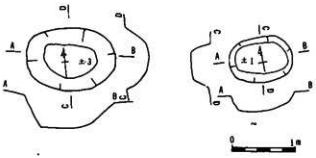


図21　大原遺跡土壙１号・３号

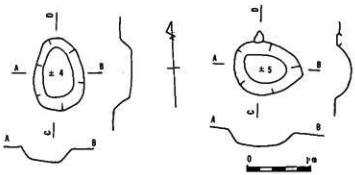


図22　大原遺跡土壙４号・５号

5.　遺構以外の遺物と石器一覧表

９号住居址の西１.５ｍより漸位層下部のローム層に密着して有舌ポイントが，また北１ｍに細刃器とみられる剥片石器２点がローム層に接して出土している。

有舌ポイント（図32の１）は長さ６.５㎝，幅２.６㎝，厚さ０.８㎝，チャート製で斜めの並行剥離が施され精巧な作りである。細刃器とみられる剥片石器（図32の２・３），２は長さ１.９㎝，幅０.８㎝，厚さ２㎜，３は長さ１.６㎝，幅０.６㎝，厚さ２.５㎜の小形のものであり，先端部に打面調整が施されている。これらは縄文草創期に位置づくものであり，集石炉Ⅰ・Ⅱ号，集石，焼土帯との関連で把えたい。

大原遺跡出土石器一覧表（表２）

打…打石斧　横…横刃形石器　敲…敲打器　硬…硬砂岩　凝…凝灰岩　黒…黒曜石　花…花崗岩

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
3住	25	11	石鏃	黒	1.9	1.5		
〃	〃	12	打	凝	9.2	4.0	67	覆土
〃	13	〃	〃	〃	9.0	4.0	62	〃 使用痕
〃	〃	14	磨石斧	〃	5.7	2.4	30	〃
4住	25	15	打	硬	9.9	4.5	100	床
〃	〃	16	〃	〃	8.8	4.2	86	〃
〃	〃	17	〃	凝	11.4	3.5	75	〃
〃	〃	18	〃	硬	7.6	4.9	112	〃
〃	〃	19	横	〃	6.7	4.0	40	〃
5住	25	23	打	凝	6.5	1.8	17	床　使用痕
〃	〃	24	横	硬	9.8	4.1	52	〃
〃	32	15	石鏃	黒	2.0	1.4		〃　有茎
6住	25	28	打	硬	9.8	4.0	70	床
〃	〃	29	石錐	〃	5.5	5.4	84	〃
2住	27	12	打	硬	11.5	3.7	106	
〃	13	〃	〃	7.0	4.1	75	床　刃部欠	
〃	〃	14	〃	〃	9.2	4.1	117	〃　基部欠
〃	〃	15	〃	〃	9.3	4.9	100	〃　刃部欠
〃	〃	16	〃	〃	6.5	3.1	36	〃　基部欠
〃	〃	17	〃	凝	12.1	3.4	85	〃
〃	〃	18	〃	〃	8.3	4.5	82	〃　基部欠
〃	〃	19	〃	〃	9.1	3.1	38	〃
〃	〃	20	横	〃	11.6	5.2	88	〃
〃	〃	21	〃	硬	8.0	4.5	52	〃
〃	〃	22	〃	〃	6.2	5.5	46	〃
〃	〃	23	石錐	〃	7.9	5.8	138	〃
〃	〃	24	打	凝	8.3	3.5	50	覆土
〃	〃	25	磨製石斧	〃	8.0	3.6	60	〃
〃	〃	26	打	硬	12.7	4.6	156	〃
〃	〃	27	横	〃	9.0	4.8	121	〃
〃	〃	28	〃	〃	7.5	4.5	33	〃
〃	〃	29	〃	凝	8.5	5.7	88	〃
〃	〃	30	凹石花		13.4	8.4	700	〃
32	9		剥片石器	黒	2.2	1.0		床上
〃	〃	10	石鏃	〃	1.3	1.1		〃　（折）
〃	〃	11	海兵石		1.1	0.7		〃
〃	〃	12	〃		1.1	0.8		〃
33	1	石皿	花	35.0	23.0			〃
7住	29	15	打	硬	11.0	4.4	95	床
〃	〃	16	〃	凝	12.2	4.9	171	〃　使用痕
〃	〃	17	〃	〃	12.0	3.5	100	〃
7住	29	18	石匕	砂岩	9.3	2.4	34	床
〃	〃	19	横	硬	8.0	7.2	76	〃
〃	20	凹石花			9.7	6.9	358	〃
〃	30	1	砥石	砂岩	22.4	9.4	860	覆土下層
〃	〃	2	打	硬	11.0	4.0	90	〃
〃	〃	3	〃	〃	10.9	4.1	95	〃
〃	〃	4	〃	〃	9.5	3.4	70	〃
〃	〃	5	〃	凝	11.2	4.0	115	〃
〃	〃	6	〃	〃	10.2	3.0	75	〃
〃	〃	7	〃	〃	14.5	3.3	72	〃
〃	〃	8	横	硬	10.8	7.5	162	〃
〃	〃	9	〃	〃	11.0	5.5	60	〃
〃	〃	10	〃	凝	10.3	4.6	79	〃
〃	〃	11	〃	硬	6.0	2.7	15	〃
〃	〃	12	打	凝	9.7	4.0	60	覆土
〃	〃	13	横	硬	7.4	3.2	28	〃
〃	〃	14	〃	〃	10.0	4.7	50	〃
〃	〃	15	石錐	〃	4.5	2.7	17	〃
〃	〃	16	敲	〃	14.7	5.0	425	〃
〃	〃	17	凹石花		12.6	9.3	700	〃
〃	33	2	石皿	花	41.0	21.0		覆土下層
8住	31	7	打	凝	14.6	5.0	210	覆土
〃	〃	8	〃	〃	14.5	3.0	125	〃
〃	〃	9	石匕	〃	7.0	5.0	39	〃
〃	〃	10	打	〃	10.0	4.0	95	〃
〃	〃	11	横	硬	11.0	6.7	155	〃
〃	〃	12	〃	〃	10.0	5.5	76	〃
〃	〃	13	〃	〃	8.3	4.0	47	〃
〃	〃	14	石皿	片麻岩	15.0	13.0		炉址
〃	33	3	〃	花	52.9	32.0		床
9住	32	4	石錐（ポイント?）	黒	2.5	1.1		
〃	〃	5	石炭	〃		1.0		折れ
〃	〃	6	スクレーパー	〃		1.7		〃
〃	〃	7	〃	チャート		2.0		〃
9住	32	1	有舌ポイント	チャート	6.5	2.6		
周辺	〃	2	組刃器状の剥片石器	黒	1.9	0.8		
〃	〃	3	〃	〃	1.6	0.6		
撹土層	32	8	石錐	黒		1.2		折れ

(Ⅱ) 富 田 窯 址

富田窯址の調査は初め土採場となり，調査対象になっていたが，土採場変更によって窯址の一部調査に終った。南北に通じる道路西側が土採場となり，その調査では段をもって東に上る傾斜面があり，全面に焼土がみられた。その段の下部の平坦面には南北方向に並ぶ4この柱列があり，その西は耕作によって荒

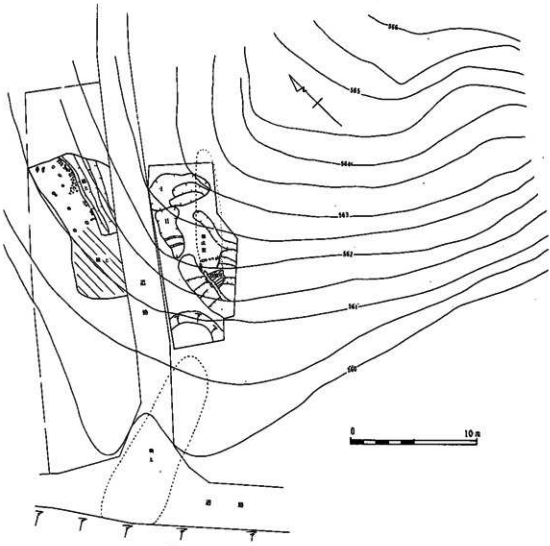


図23 富 田 窯 址

らされて不明であったが，作業小屋とみられた。その南側の平坦面にも焼土が全面にみられたが窯址とみるものはない。

道路東側の畑は焼土と陶片の多くが表採された所であり，桑畑を除く西側の野菜畑の一部調査であった。北側に東西方向に向く径5m，南北2.6mの楕円形，深さ60cmの掘りこみ（Ⅰ）と，その南に接して南北方向に径4.1m，東西1.5m，深さ65cmの不整形の長楕円形の掘りこみ（Ⅱ）があり，後者には焼土が全面にみられ，特に南側には顕著にみられたが窯址としての施設かは不明であり，或は素焼の窯との見方もあるが確証はない。両者とも内部に多量の陶器片と窯道具片・窯壁の破片等が礫に混って出土している。

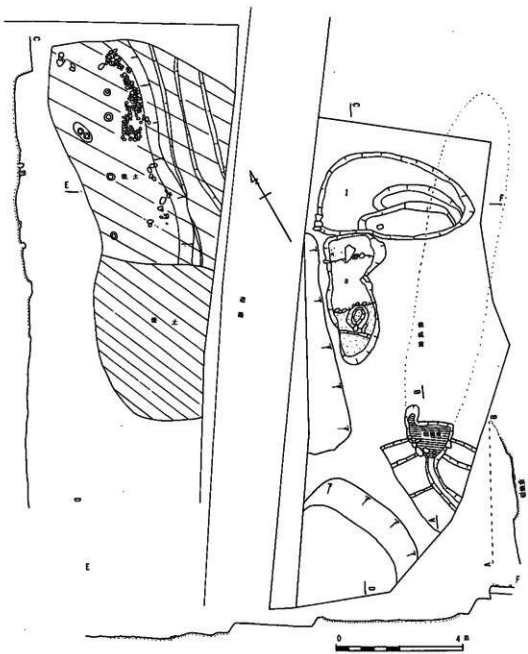


図24　富田窯址と地形図

これらから南の傾斜を下った調査区域の南東部に燃焼窯が発見されている。

窯の構造（図24）

燃焼室のみが発見され，N40°Eの方向にむき，東西最大幅1.5m，南北1.2mの北側に開く三角形をなし，側壁を僅かに残し，内部に陶器片を敷き，その上を粘土で堅めている。土中の湿気を防ぎ燃焼を良くするためである。燃焼室から50°の強い傾斜をもって一段高まり燃焼室へと移るが，その上は開墾時に破壊されている。机山山裾の傾斜からの推定では焼成室は25°前後の傾斜をもったものとみられる。（図23）

机山山麓の傾斜面を利用して窯は構築されたものであるが，開墾に際し，畑の障害となる窯遺物を除去するため，Ⅰ・Ⅱの穴を掘り，これらを埋めたものとみるが妥当であろう。

遺物（図34・35・36）富田窯には壺・鉢・輪花鉢・浅鉢・植木鉢・大形鉢・スリ鉢・天目茶碗・湯呑茶碗・筒花入・コボシ・小形焙烙がある。図34は燃焼室底部に敷かれたもので，1の二耳壺は素焼，4のスリ鉢は鉄泥をぬり，2・6の鉢，3・7・8の甕は薄い灰釉をかけたもので淡灰緑色を呈しており，比較的古い要素をもつものである。

図35・36は調査した窯で焼かれたものであり，木灰釉が施され，図35の1・3の鉢，4の大形鉢，5・6の輪花鉢，2・8の甕，図36の4の湯呑茶碗，5の筒花入は緑色の釉がたっぷりかかり美しい色を呈している。図35の7の輪花鉢は乳白色を呈し，それに緑の混じる美しい光沢をもっている。図35の9の鉢，10のコボシ，図36の2・3の天目茶碗，6の蓋付壺，7の壺，8～10の蓋はいずれも生焼けの釉が溶けず黄白色をなしている。11はやや大きめ，12は小形の焙烙でその用途によって素焼である。図36の1は無頸壺とみられ青褐色の木灰釉がかかり竹篦による平行沈線を肩部から底部に下すもので富田窯では変った手法とみられる。11～13は植木鉢で11は乳白色の釉がかかり，他は素焼である。

富田窯にみられる釉は木灰釉を施すもので江戸時代後期のものであり，また天目茶碗にみられる立上りに丸味をもってくるのも江戸時代後期である。甕の肩部に数条の木篦による線を施すが，この窯にみられる特徴でもある。

燃焼室底部に敷かれた甕・鉢・スリ鉢は江戸中期の様相を残すもので，富田焼は二次期にわたって焼かれたものと推測される。今次調査の窯址は江戸時代後期のものであり，この窯の底部に敷かれた陶片は，前時期の窯のものを利用したものと考えたい。

窯道具にはトチ・ツク・台・ネブタ等多く出土しているが，サヤは検出されていない。雑器を主にした窯である。

Ⅳ　ま　と　め

（Ⅰ）　大　原　遺　跡

大原段丘面での昭和53年度土地改良事業は飯田市区域を主体とし，全面的な圃場整備ではなく，区画整理・農道開発を主としたため調査区域は制約されていたが，発掘調査は今迄の分布調査で遺物の表採をみた岩沢支流の谷頭浸蝕のせまっている段丘縁部に焦点をおいて行なうことができた。

上段部のⅡ調査区よりの集石炉２とそれに関連するとみる集石・焼土帯があり，それらよりの遺物は石鏃と黒曜石片のみであり，焼土をもつローム層内にまで木炭が含まれ，またすぐ下段の低地帯をへだてたⅠ調査区東端部よりの有舌ポイント，細刃器とみる剥片石器の出土からみて縄文草創期のものとみられる。

Ⅰ調査区では縄文中期中葉末の住居址８と早期ともみる９号住居址が調査されている。９号住居址は土器の出土はなく，石鏃とスクレーパーとみる石器片と黒曜石・チャート片の出土をみており，周辺出土の有舌ポイント，剥片石器の関連は不明であるが，炉址の形態からみても縄文早期を下らない住居址とみられるが，その決め手となるものはない。

縄文中期中葉末の住居址は段丘縁部に沿って展開されている。円形プランをなす竪穴住居址であるが，八角形ともみられる弱い突出部をもつものがあり，中期後半の住居址に比し規模は小さく，径４ｍ前後であり，炉址は小型の石囲炉であり，ローム層への掘りこみも浅い。土器はキャリパー型の深鉢を主体とし，細い粘土紐の貼布による文様構成が主体となり，それによる繊細な文様で飾る７号住居址出土の特殊な土器がある。櫛形文をもち，縄文中期中葉末から中期後半期に移行する時期のものとみられ，伊那谷に発達した土器といえよう。

石器は打石斧を主体とし，横刃形石器が続き，石匕・石鏃・凹石・石皿・石錘・砥石があるが，大原遺跡の下位の段丘面にある伊久間原遺跡の同時期の住居址では横刃形石器は少なく，石錘の多いのが注目されたが，大原遺跡においては石錘出土は極少であるのに比し，横刃形石器が多く，地形環境による石器のあり方が考えさせられる。

大原段丘面の分布調査では，発掘調査区域以外での遺物は，養豚団地東の花栽培ハウス地点から黒曜石片の出土が知られ，北西端部の奴山古墳群周辺より須恵器・土師器片の表採があるが，それらは古墳に関連するものとみられる。それら以外よりの遺物の発見はない。谷頭浸蝕の終わる地点を中心にした湧水をもつ段丘縁部に居住の地が求められたものである。現在乳牛畜舎の建てられた地域は未調査であったが，牛舎建設前の分布調査では表採遺物のみられた所であり，縄文時代の集落はそこにまで展開されていたものとみられる。

(Ⅱ) 富田窯址

富田窯については，喬木村富田地区にもあり，それを一般的に富田窯と呼んでいる。しかし机山山麓にある窯址も富田窯と呼ばれ，平沢清人先生によって，それが知られている。大原は行政区画では西半分が飯田市下久堅（飯田市合併前は下久堅村）に入っているが，土地所有者の多くは富田地区の人たちであり，今次調査の窯址の所在する土地所有者も富田である。富田窯に関する記録はなく，その時期，誰が焼いたかの伝承もないが，富田・大原両窯は同一人または同家系の人が場所を移して焼いた窯とみられる。

調査結果では，はっきり窯址といえるのは燃焼室とその立上がり部である。それより北に向く燃焼室は開墾時に破壊され，畑耕作の障害となる窯遺物は2個所の穴に礫とともに埋められたものとみる。

未調査の東側桑畑の傾斜は25°前後あり，それより推定して焼成室は25°前後の傾斜をもって構築されたものとみられる。西道路下にみられた柱列は作業小屋とみられるが，その周辺の焼土帯については不明である。また焼土は南側の道路面にもみられ，桑畑には焼土があり，陶片も発見され，窯は他にも構築されていたものと推測される。

燃焼室底部に敷かれた陶器片は江戸時代中期の要素を残すもので，窯出土の陶器は木灰釉を施すものであり，天目茶碗の立上り部のふくらみ等からみて江戸後期のものである。窯道具にはサヤが発見されていない。天目茶碗，湯呑茶碗が僅かにみられる他は壺・甕・鉢・浅鉢・スリ鉢・植木鉢・焙烙等があり，雑器を主にした窯である。甕の肩部に数条の木箆による線をめぐらすが，この窯の特徴である。

富田窯構築の自然的条件は大原段丘南縁部に広がる粘土層と岩沢支流の水，机山山裾の強い傾斜面と周囲に広がる松山がある。人的条件については記録がなくそれを知ることはできないが，江戸時代中期後半に焼かれ，その後松山の育つのを待って江戸後期に再び窯が築かれたものとみられるが確証はなく，今後の調査にまつものである。

おわりに，今次調査にあたっては富田窯については名古屋大学楢崎彰一先生の，地形地質については矢亀勝俊先生の御指導を受け，さらに地形地質についての矢亀先生の原稿も厳き，大沢和夫先生，水野英男先生の助言が得られ，作業にあたられた方々の熱心な作業態度と下伊那教育会考古学委員会の先生方の応援があり，南信土地改良事務所，地域の方々，工事を請負われた勝間田建設の御理解・御協力があったことを深謝したい。

（佐藤甚信）

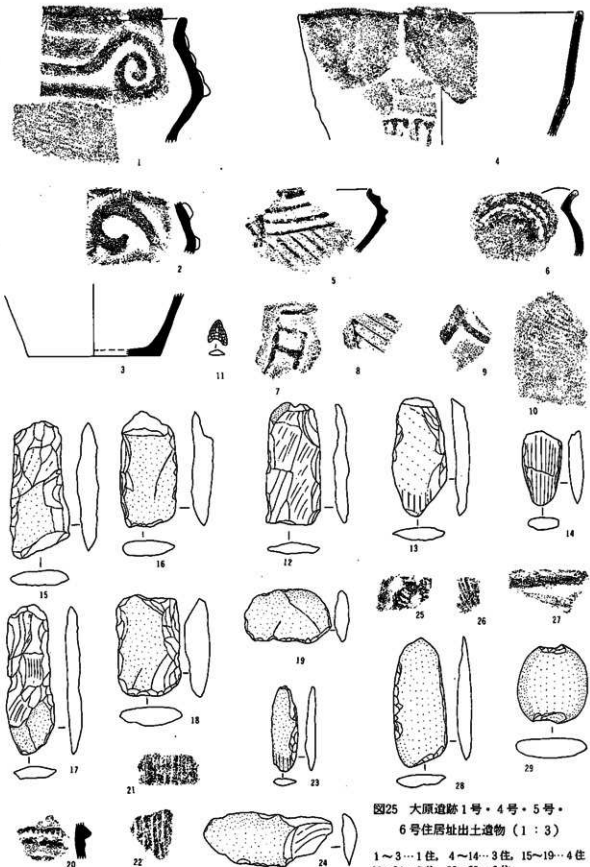


図25　大原遺跡１号・４号・５号・
６号住居址出土遺物（１：３）

１～３…１住，４～14…３住，15～19…４住
20～24…５住，25～29…６住

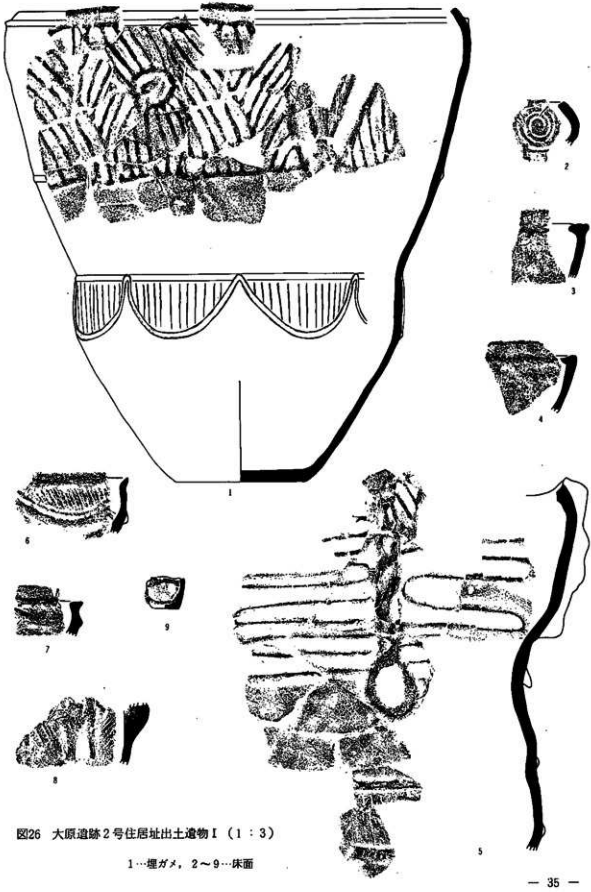


図26　大原遺跡２号住居址出土遺物Ⅰ（１：３）

１…埋ガメ，２～９…床面

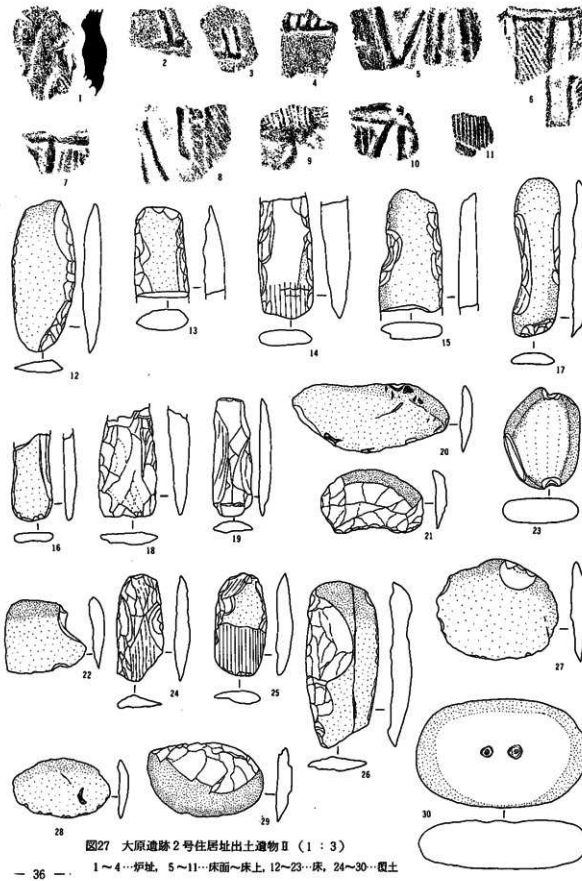


図27　大原遺跡２号住居址出土遺物Ⅱ（１：３）

１～４…炉址，５～11…床面～床上，12～23…床，24～30…図土

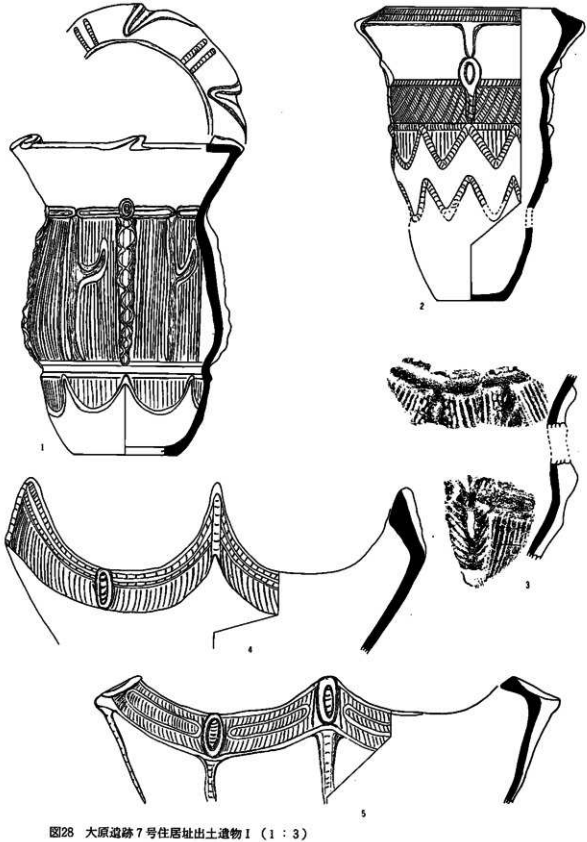


図28　大原遺跡７号住居址出土遺物Ⅰ（１：３）

１～３…炉址周辺，４・５…覆土下層

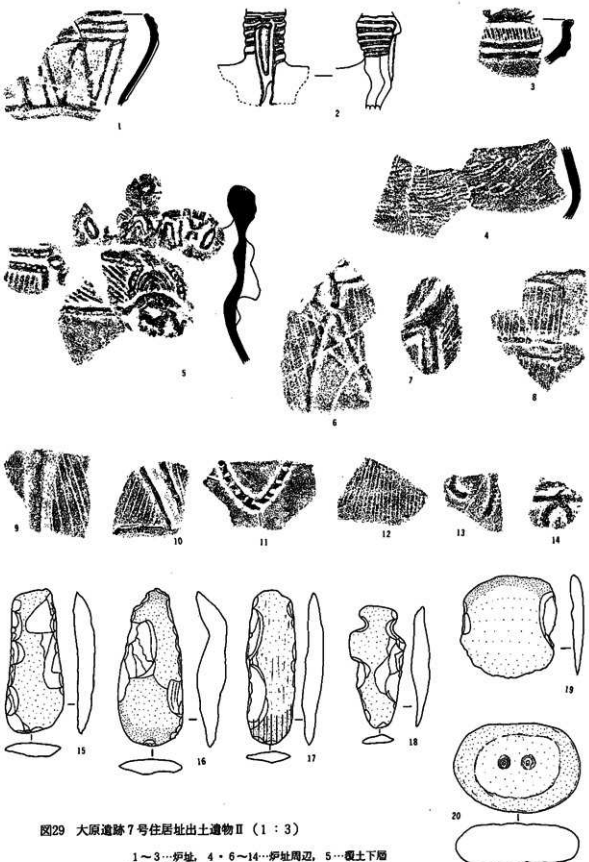


図29　大原遺跡７号住居址出土遺物Ⅱ（１：３）

１～３…炉址，４・６～14…炉址周辺，５…覆土下層
15～20床面

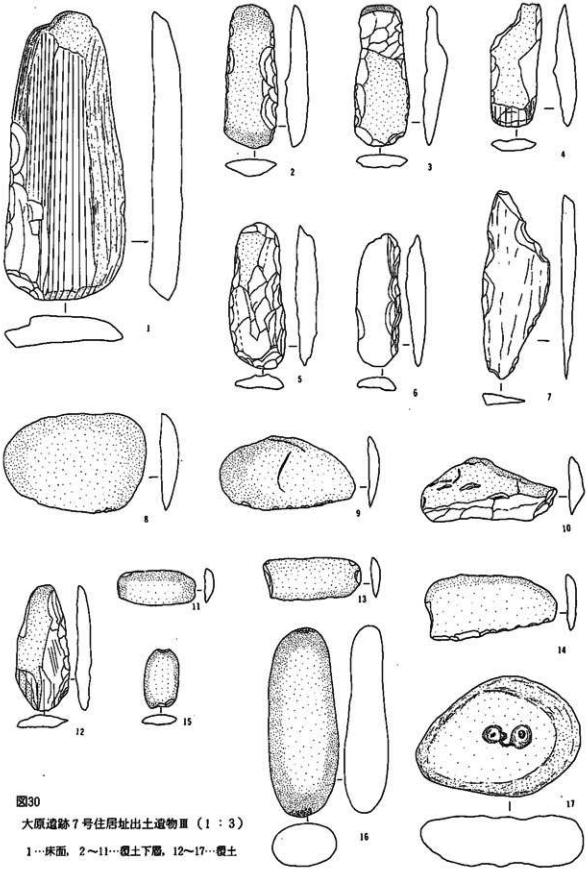


図30

大原遺跡７号住居址出土遺物Ⅲ（１：３）

１…床面，２～11…覆土下層，12～17…覆土

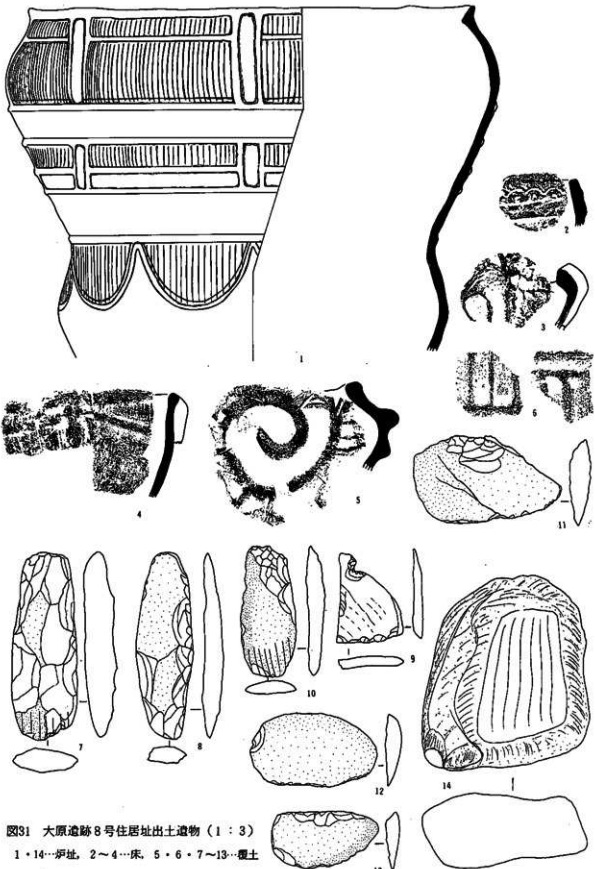


図31　大原遺跡8号住居址出土遺物（1：3）

1・14…炉址，2～4…床，5・6・7～13…覆土

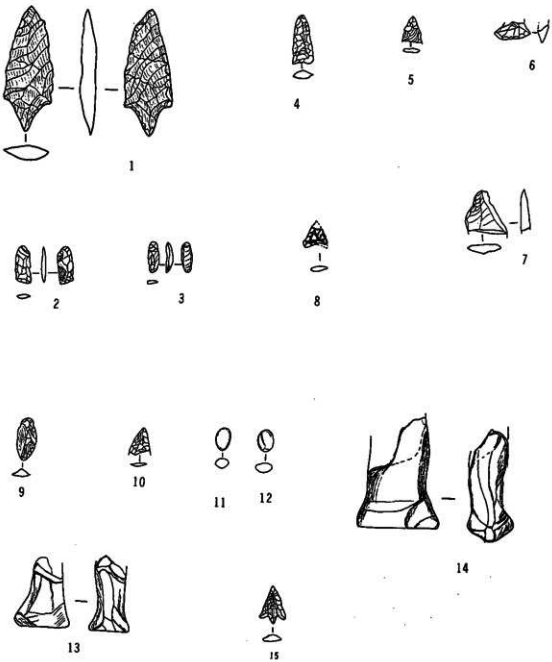
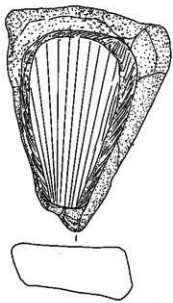
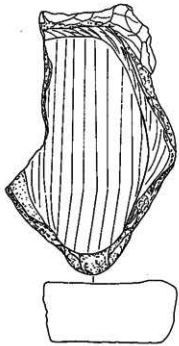


図32　大原遺跡出土小型石器及土製品（1：2）

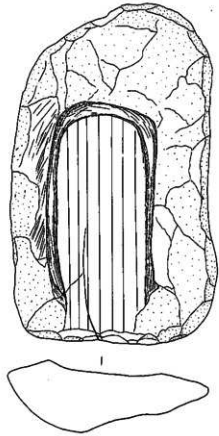
1～3…9住周辺，4～7…9住，8…焼土帯
9～13…2住，14…7住，15…5住



1



2



3

図33　大原遺跡出土石皿（1：6）

1…2住，2…7住，3…8住

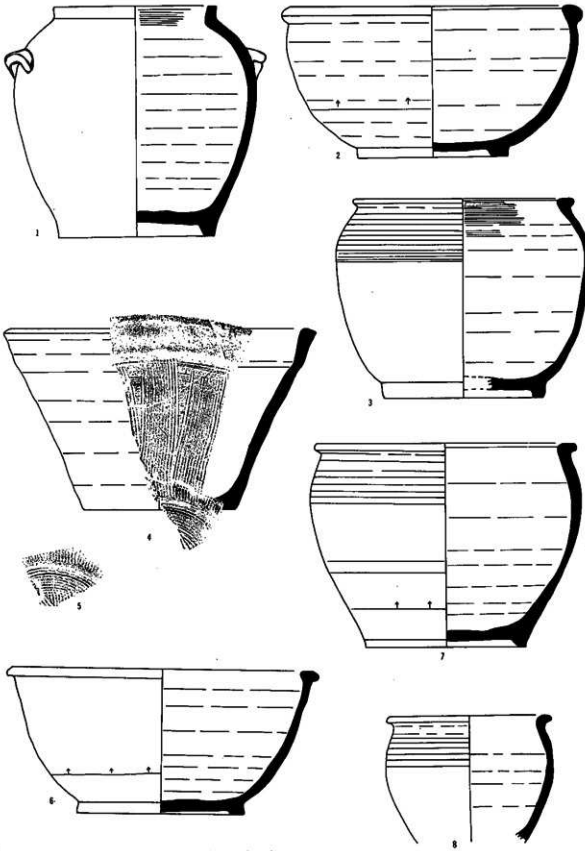


図34　富田窯址出土遺物Ⅰ（1：3）　（燃焼室底部）

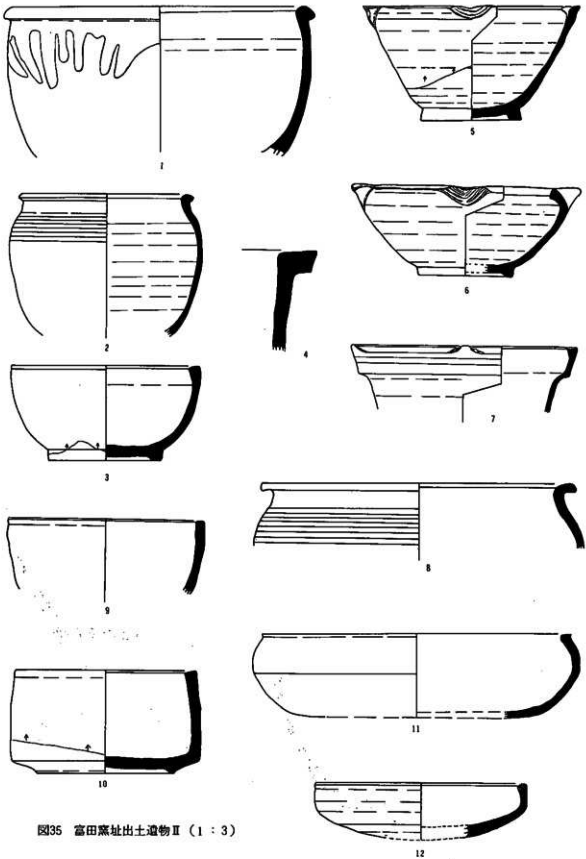


図35　富田窯址出土遺物Ⅱ（1：3）

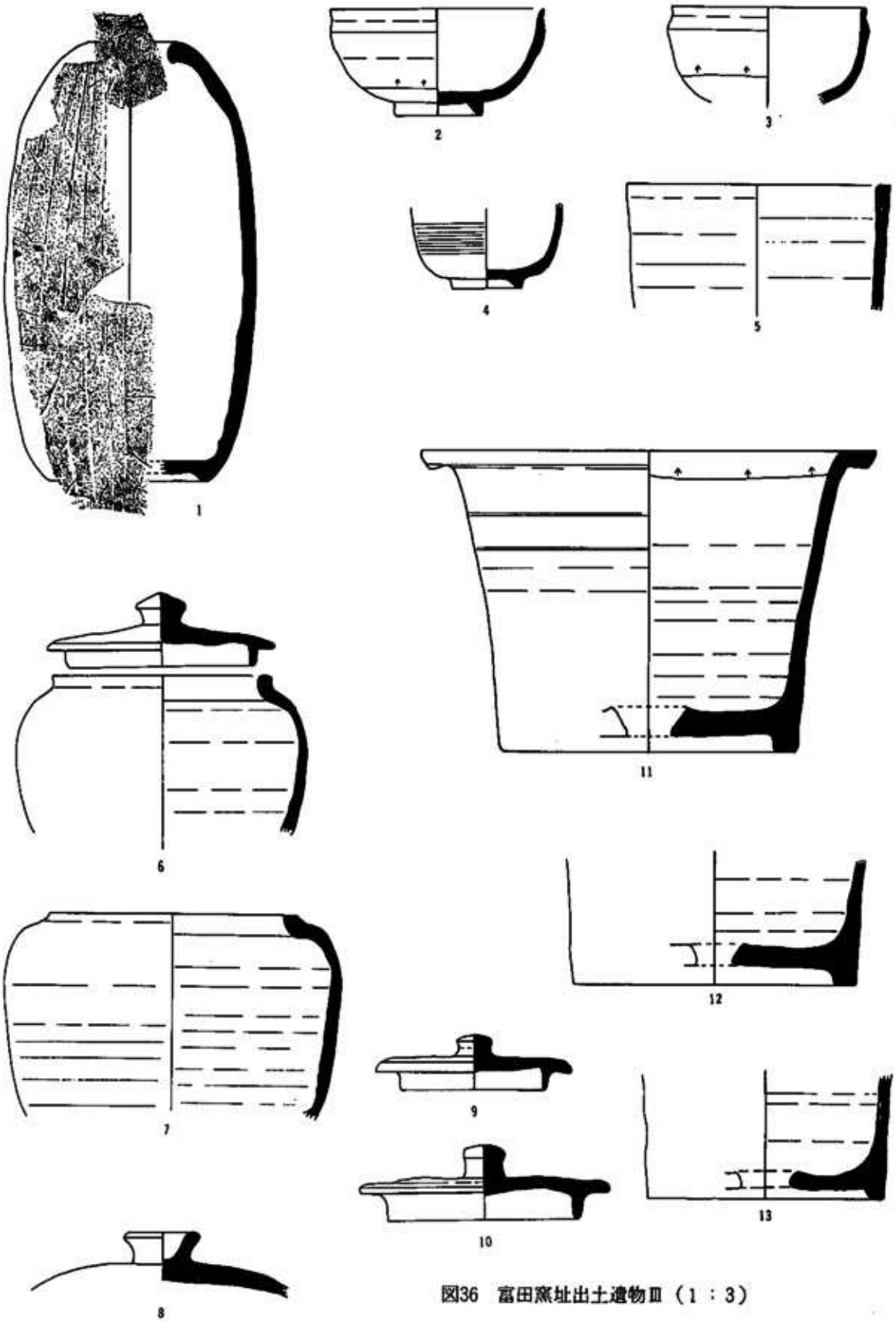


図36　富田窯址出土遺物Ⅲ（1：3）

図版Ⅰ　遺　跡

大原遺跡段丘南縁部 ― 東より（遺跡の中心部）

大原遺跡遠景　前方右側の台地

大原遺跡 ― 南より

大原遺跡 ― 西より　前方の山は机山

大原遺跡 ― 東より

大原遺跡 ― 北東より

大原遺跡　工事終了後 ― 東より

大原遺跡　工事終了後 ― 西より

岩沢支流の谷頭浸蝕部 ― 集落は段丘縁部に沿ってある

岩沢支流の谷頭浸蝕部 ― 下から（南より）

岩沢支流の谷頭浸蝕部 ― 上から（北より）

岩沢支流の谷頭浸蝕部 ― 西より

谷頭浸蝕部の湧水 ― 水呑場となり茶碗が置いてある。

大原より見下す　下位段丘面 ― 左より中尾・大中尾・伊久間原

伊久間原遺跡を見下す

奴山１号古墳

奴山２号・３号古墳 － 左が２号

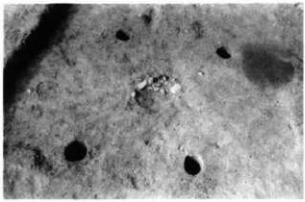
奴山５号古墳

藤　塚

赤坂古墳 － 大原段丘崖下にある

図版Ⅱ　遺　構

大原遺跡１号・２号住居址 ― 下から１号・２号



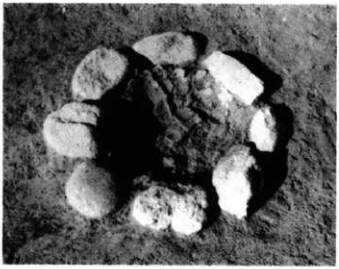
大原遺跡１号住居址

大原遺跡１号住居址，炉址

大原遺跡２号住居址　―　北から

大原遺跡２号住居址　―　南から

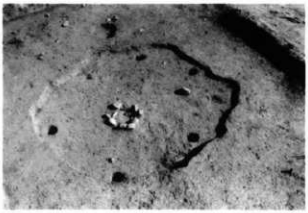
大原遺跡２号住居址，炉址と埋甕



大原遺跡２号住居址，炉址
― 底部に土器が敷かれる

大原遺跡２号住居址埋甕

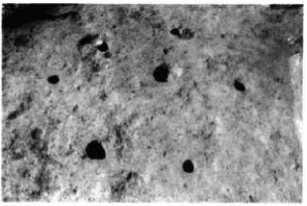
大原遺跡３号住居址・土壙３号 ― 東より



大原遺跡３号住居址・土壙３号 ― 西より

大原遺跡３号住居址，炉址 ― 底部に石を敷く

大原遺跡5号住居址

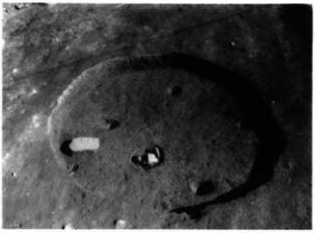


大原遺跡6号住居址

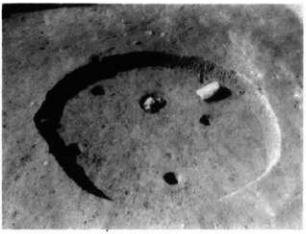
大原遺跡7号住居址

大原遺跡7号住居址上部石組

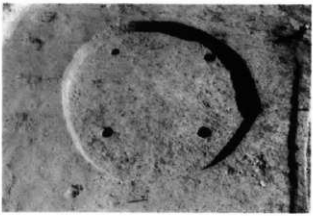
大原遺跡7号住居址土器出土



大原遺跡８号住居址　―　西から



大原遺跡８号住居址　―　東から



大原遺跡９号住居址

大原遺跡４号住居址と溝状遺構

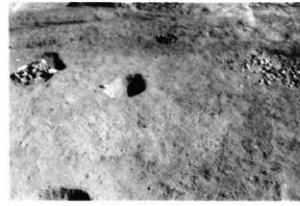
大原遺跡溝状遺構南西側

大原遺跡溝状遺構全景

大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号，集石，土壙4・5号 ― 北より
― 左より集石炉Ⅰ，土集石，中土壙5，右下集石炉Ⅰ
右上土壙4 ―

大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号
― Ⅰ号上部の焼土をはずす，左上はⅡ号の
集石をはずす

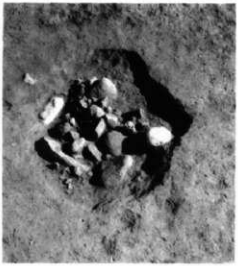
大原遺跡焼土帯



大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号，集石，土壙5号
― 左より集石炉Ⅰ，土壙5，集石炉Ⅱ，集石 ― 西より

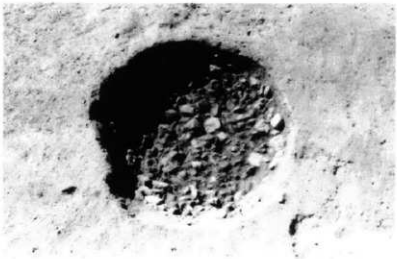
大原遺跡集石炉Ⅰ・Ⅱ号，土壙5号

大原遺跡集石

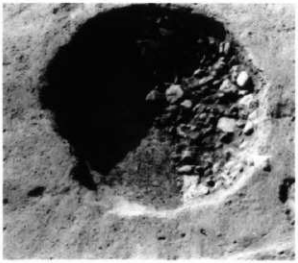


大原遺跡集石炉Ⅰ号　①上部

大原遺跡集石炉Ⅰ号　②上部焼土を除く



大原遺跡集石炉Ⅰ号　③底部の敷石

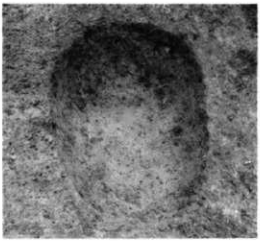


大原遺跡集石炉Ⅰ号

④敷石２分の１をたち割り調査

大原遺跡集石炉Ⅱ号

大原遺跡Ⅰ調査区北側のグリッド調査
— 溝状遺構から東側へ



大原遺跡土壙３号

大原遺跡有舌ポイント出土

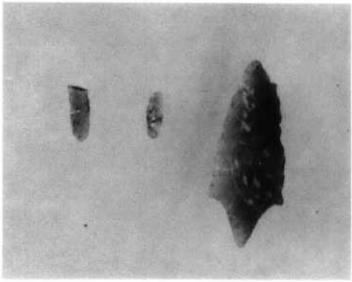
大原遺跡Ⅰ調査区グリッド調査 — 南側

大原遺跡Ⅱ調査区グリッド調査

図版Ⅲ　大原遺跡遺物

大原遺跡２号住居址出土土器

大原遺跡２号住居址出土石器



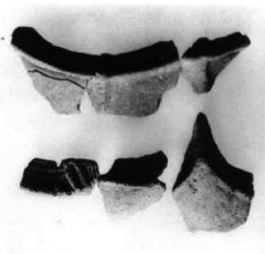
大原遺跡出土有舌ポイントと細石刃状剥片石器

大原遺跡７号住居址出土石器１

大原遺跡７号住居址出土石器２

大原遺跡７号住居址出土土器１

大原遺跡７号住居址出土土器２



大原遺跡７号住居址出土土器３

大原遺跡７号住居址出土及び土製品

図版Ⅳ　富田窯址

富田窯址　―　工事前

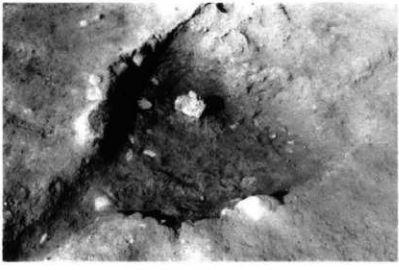
富田窯址　―　工事後

富田窯址　―　手前が燃焼室

富田窯址　―　西よりみた調査後の全景

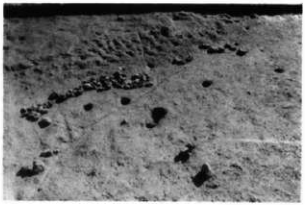
富田窯址　焼成室と上部
（焼成室の開墾による破壊）

富田窯址燃焼室　－　上から

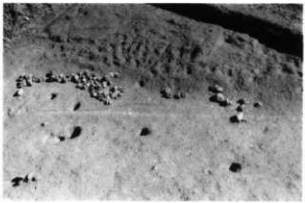


富田窯址燃焼室　－　下から

富田窯址燃焼室　－　底部に陶器を敷く



富田窯址　道路下の傾斜面
— 柱列は作業場跡？ —　西より



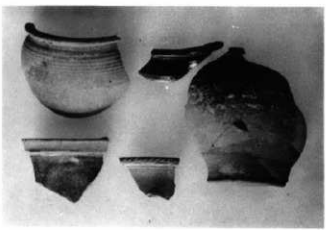
富田窯址　道路下の傾斜面 — 南より

富田窯址Ⅰ・Ⅱの掘り穴
— この中に窯道具，窯壁が捨てられていた —

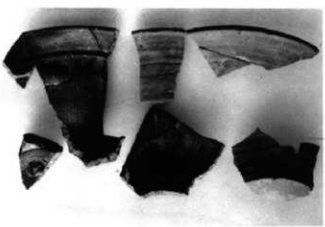
富田窯址陶器出土状況１

富田窯址陶器出土状況２

壺　　甕



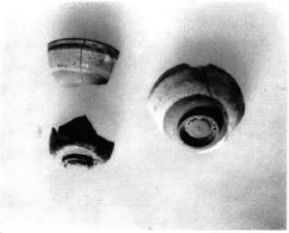
甕，左下は大甕



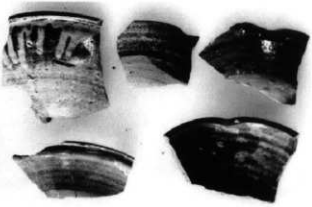
ス リ 鉢

左植木鉢，右鉢

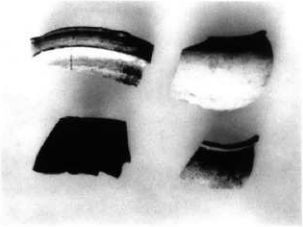
輪花鉢，右下は甕



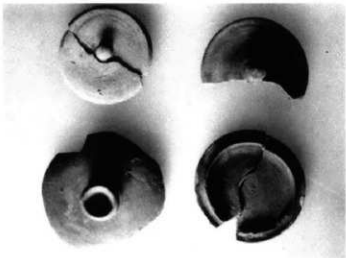
右天目茶碗，左下は湯呑茶碗



輪花鉢，左上は鉢

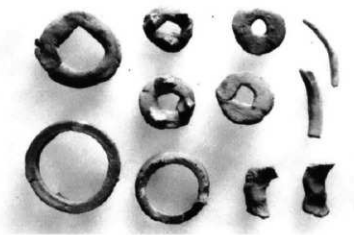


壺

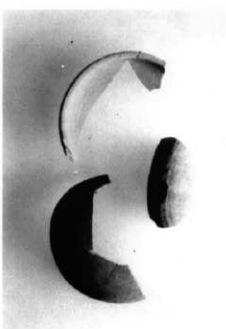


蓋

徳利？



窯道具



焙　烙

植木鉢

図版Ⅵ　発掘スナップ

Ⅰ調査区の調査

Ⅰ調査区の調査

Ⅰ調査区の調査

Ⅰ調査区の調査

Ⅰ調査区の調査

7号住居址調査1

7号住居址調査2

Ⅱ調査区の調査

Ⅱ調査区の調査

Ⅱ調査区の調査

Ⅱ調査区の調査

富田窯址調査

富田窯址調査

富田窯址調査

富田窯址調査

富田窯址ぎわに工事がせまる

調　査　組　織

1. 大原道跡富田窯址埋蔵文化財発掘調査委員会

勝野好一	飯田市教育委員会委員長
沢柳俊夫	飯田市教育委員
大田中一郎	〃
松島勝郎	〃
林　研二	飯田市教育長
相津　実	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

2. 調査団

団長	佐藤甦信
調査員	浅井舎人
〃	林　登美人
〃	松村全二

3. 指導者

楢崎彰一	名古屋大学教授
大沢和夫	飯田女子短大教授
今村善興	県文化課指導主事
丸山敏一郎	〃
関　好一	〃
矢亀勝俊	市前教育長
水野英男	陶芸家

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

相津　実	社会教育課長
山下舜平	課長補佐，係長
熊谷里恵子	主　事

5. 作業員

北村重実	福島明夫	中平兼茂	藤本徳男
宮下元治	北島喬二	原　三行	吉沢徳男
松　定蔵	木下辰雄	平栗光司	牧内住子
柳沢八重子	桐生うめ	大平豊子	下平園枝
下平文保	佐藤いなゑ	田口さなゑ	

お　わ　り　に

竜東一貫水路（通称）を基幹とした畑地帯総合開発小渋地区，大原北の原工区の改良事業が大原地籍で実施されることになった。

52年度事業として高木村教育委員会が調査した伊久間原地区に数多く各時代の遺跡が所在していることが明らかになったので，その上段の大原地籍にも当然遺跡が所在するものと考えられたので，県教委に現地協議をお願いした上，事業担当の南信土地改良事務所と事前に合議して，埋蔵文化財発掘調査記録保存事業に着手した。

また大原遺跡のすぐ上部に江戸時代末に陶器を焼いた富田窯址が確認されていたので同時に着手した。

今回の事業費は5,200,000円，内1,300,000円が地元負担分に相当する国庫補助金の対象分で，国庫補助金650,000円，県費補助金195,000円，市費負担455,000円，他は全額南信土地改良事務所の負担金として市が受け，飯田市教育委員会の直轄事業として実施した。

この発掘調査は耕地であるため，秋の収穫の終った後に開始しなければならない状況下にあったが，調査面積が広いので，地権者の了解を得て早目に着手した。幸い土地所有者をはじめ，事業担当事務所の方方の格別な理解と援助とご指導によって，計画した面積の調査が出来，貴重な資料等が発掘され，大きな成果を残して完了しましたことは感謝にたえない。

調査体制は，団長に佐藤甚信先生，調査員に浅井舎人・林登美人・松村全二各先生をお願いし，先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的に協力をいただき，指導者の名古屋大学教授楢崎彰一先生にはとくに窯址出土の陶器の指導を，飯田女子短期大学大沢和夫先生，県教育委員会文化課指導主事今村善興先生丸山敏一郎先生，関好一先生には全般について適切な助言をいただき，矢亀勝俊先生には地質面で，水野英夫先生には陶芸家の立場から助言と指導をお願いしました。また，報告書の作成執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもって当られ，ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和54年3月

飯田市教育委員会社会教育課

大原遺跡・富田窯址

埋蔵文化財発掘調査報告書

1979.3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

印刷　飯田市通り町1丁目2番地
株式会社　秀　文　社